
図書館戦争・短編集

山子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書館戦争・短編集

【Zコード】

N1178V

【作者名】

山下

【あらすじ】

『図書館戦争』の一次創作です。

かなり前に、ブログサイトに載せていた作品です。

堂上 × 郁

注：拙過ぎる文章です。

傷跡（前書き）

初SSです。

時期は、図書館戦争あたり。
堂上×郁です。

「笠原、何がどうした？」

まだまだ不慣れな館内業務も終わり、日報を書いていた郁に堂上は自分のコメカミ付近をトントンと叩いて見せた。

「はい？」

「ここ。なんか赤くなつてないか？」

「え？」

堂上の言葉に近くにいた小牧が郁を覗き込む。

「本當だ。笠原さん、ちょっと擦り傷になつてるよ」

「ええ～！～ホントですか！～！」

郁は引き出しを開け、可愛らしいポーチを取り出した。

いくら自分で戦鬪職種大女と言っているが、こいつは実に女子らしい。

ポーチから一つ折りの手鏡を取り出すと、位置を調節して確かめる。

確かにそこは、少しだけ擦り傷があった。

「わあ、本當だあ～」

郁は、ちゅんちゅんと擦り傷を触りバツの悪い顔をした。その顔に気付かない堂上ではない。

「で、どうした？」

「今日は、図書館業務だったし、何もトラブルはなかつたよね？」

上官2人にジッと見つめられ少々居心地が悪い。

だが、郁としては言いたくない事柄らしく思案顔で瞳を泳がした。その郁の態度に堂上の眉間の皺が深くなる。

「上官への報告は義務だぞ」

腕を組んで、堂上は威圧的に座っている郁を見下ろす。

郁は、上田遣いで堂上、それに小牧を見ると、「う～」と唸つて頭垂れた。

「・・・・ 実は今日、児童室で3歳ぐらいの男の子に後ろから思いつきり足に体当たりされちゃいまして、油断してた事もあってバランス崩してこけそうになつたんです。男の子も巻き添えにしそうになつちゃつて、それを回避しようと足搔いた結果、男の子の持つていたミニカーがガツンと・・・」

郁の報告を聞くなり、堂上は大きく息を吐いた。

「なんで言い淀んだ」

「ホント、別にヤバイ事柄でもないのに・・・」

笠原さん？と、小牧も不思議そうに首を傾げる。グツと喉を鳴らした郁は、机に突つ伏して弱弱しく答えた。
「だつて、3歳児の体当たりぐらいで戦闘職種がこけるなんて恥ずかしくて言えないですよ～」

「確かに、全力で来られてても3歳児くらいなら大丈夫だよね？」
「それがツツ！！3歳児の身長つて膝カツクンの良い位置なんですよ！！あれが後ろからじやなくて前からだつたらあツツ」

郁は、顔を羞恥に染めて叫ぶ。

その言葉に、小牧が小さく上戸に入った。

「アハハハ・・・笠原さん・・・アハハ・・・最高過ぎ・・・」
「笑わないで下さい　！だから、言いたくなかったんです」

「アホか、貴様は！」

ガツンという衝撃と共に、それは郁の頭に振ってきた。

「いつたあ　ツツ。いきなり何するんですかツツ、堂上教官！」

！」

まだ、微妙に突つ伏していた郁は脳天と額にダブルで痛みが襲つた。郁は頭と額を手で押さえつつ堂上に向き直る。

「うるさい、バカ！顔に傷なんか作つて何事かと思つだろ？が！」

「だつて」

「だつてじゃない」

「堂上は心配したんだよねー？」

そこに、笑いを含んだ小牧がすかさずつっこむ。

「小牧！ツツちが！」

「あれえ、俺は上官として心配したよ」

更に、絶妙なツツミが入り、バツの悪くなつた堂上は郁から田線を外し、自分のデスクに向き直つた。

郁は、堂上から背を向けられ、自分が隠したいがために上官への報告を滞り、なかつた事にしようとした自分に自己嫌悪した。

情けない。

少し泣きたい気持ちになつたが、ここで泣くのは卑怯だと思い郁は顔を伏せ耐える。

何とか涙が引つ込めさせた郁は、謝罪をしようとした瞬間、ポンポンと頭に手がのせられたのに気付いた。

小さくため息が聞こえ、郁の伏した視界に膝を付く影が写つた。慌てて顔を上げようとした瞬間、堂上の声によつて動きを封じ込められた。

「動くな」

堂上は、郁の髪を軽く掬い上げ、持つていたそれを慎重に郁の傷にあてがつ。

「つたく。女が顔に傷なんかつけるな、跡が残つたらどうする？」

「バンソーハー？」

「即席だ。何もせんよりは良いだろ？ 療に帰つたら、ちやんと治

療しろ」

「あ、ありがとうございます」

「それから」

バンソーハーを貼り終えた堂上は立ち上がりと郁の髪をガシヤガシヤとかき回した。

「わわわわ」

「子供に怪我をさせなかつたのは良くやつた。次からは、どんな事でもちやんと報告しろ」

「はい。すみませんでした」

素直に謝つた郁に堂上は満足そうに微笑んだ。

「ねえ…仲が良いのは分かったから、そろそろ良い…早く日報もらつて帰らないと晩飯食いそびれそうなんだけど」

小牧の声に弾かれたように一人は小牧を振り返った。
その顔はニヤニヤしている。

音が鳴るぐらい勢い良く郁の頭から手を離した堂上は、薄く赤面した顔を隠すように郁から背を向け怒鳴る。

「笠原ツツ…！」

「はいツ！」

郁も弾かれたように返事を返し、途中だつた日報を書き始めた。
その様子に小牧は小気味良く噴出し上戸に入つた。

終

暖かい涙（前書き）

図書館危機あたり。堂郁風味？

郁ちゃんの思い出。

暖かい涙

笠原、あなたのフォーム大好きよ。

爽やかな春の朝。

植物を育てる心地よい太陽が照り始めていた。
窓から入つてくる微風そよかぜが、ヒラヒラと洗つたばかりの洗濯物を揺らし、爽やかだ。

今日、堂上班は公休である。

いつもなら、ダラダラとベッドでまどろみを楽しんでいるのだが、朝から柴崎に叩き起こされてしまい、寝るに寝れなくなってしまった。

まったく、柴崎のやつ！ 郁は、気持ちの良い睡眠を遠慮なしに妨害した美しき鬼に悪態ついた。

柴崎が起き出した時間は、いつもなら郁も起きる時間だが、寝坊が許される公休日だ。夢と現実の間で、頑張つてねえー、と口の中で呟く。

そして、再び深い眠りに入ろうとしていたのだが、ベッドカーテンがを突如、音をたてて開け放たれ妨害された。

薄暗かつた空間は一瞬にして明るくなり、郁は眉を顰めて布団をギュウっと抱え込む。

あら、かわいい、と柴崎は小さく呟くと、郁の耳元にフウッと息を吹きかけた。

郁は、突然来たゾワゾワ感に飛び上がり、ベッドから滑る様に這い出した。

『おはよう。あなたさ、今日の昼、暇でしょ？ 基地近くにカフェが

新しく出来たのは知ってるわよね？付き合いなさいよ『

起きたのを確認した柴崎は、戦闘装備に取り掛かりながら用件を言う。

公休と分かっていて、あえて昨晩、誘わず、朝になつてから誘つたのは絶対にわざとのはずだ。

ピンクパールの口紅を形の良い唇に塗る。

色々な角度から、チェックを終えると、未だにボーゼンとしている郁に目線を向けて、

1300に図書館に集合、と朝から輝く笑顔で言い放つた。

しつかりと起こされた為か、一度寝の睡魔は一向に襲つてこない。

郁は、起きてしまったんだしと諦めを付け、いつも寝巻き代わりにしているジャージから、薄手の淡い黄色の長袖Tシャツに足首がキュッとなっているゆつたりとしたジーンズに着替えた。

洗濯も昨日の夜に済ませていたし、掃除も一昨日、公休だった柴崎がしてくれたとこだつたので特にすることがない。

心地よい気候、爽やかな朝。

郁は、折角だと図書館で本を借りて中庭で読書に洒落込もうと決めた。

読んでいるうちに、柴崎との一方的な待ち合わせの時間にもなるだろう。そうと決めたら早かつた。

肩掛けのバッグに化粧ポーチと財布を入れて部屋を飛び出す。

開館してまもない図書館は、まだ利用者は少なく、職員の方が多いくらいだ。

郁は、とりあえず朝から叩き起こした張本人に文句を言つべく、館内をぐるりと回つた。

探し人は、すぐに見付かった。

柴崎は、オススメコーナーの本を見やすい様に整頓していた。

郁は柴崎に気付かれぬよつ背後から近寄り、出来るだけ低い声で柴崎の名を呼んだ。

「し～ば～わ～き～」

だが、柴崎は驚く事無く郁の方に振り返り、営業用のスマイルを向ける。

「あら、お早いこと」

「うつむきーー！あれから寝れると思つてんのーー」

たいしたリアクションも見れず、内心不満に思つ。郁は気を取り直して柴崎が整頓する本棚を覗き込んだ。

「ま、いい。お昼まで中庭で本読んでるから、なんかオススメない？」

「オススメねえ」

柴崎は、そ～ねえ～、とぐるりと本棚に並べられた本を見回す。すると、突然、郁と柴崎の会話に業務部の同期が割り込んできた。

「笠原、本探してんの？」

「わー突然沸いてくるな、ビックリしたー」

「こめん、こめん。で、本を探してるんでしょ？」

だつたら、これ！！と迷う事無く1冊の薄めの本を取り出した。

青空と雲の表紙がとてもキレイだ。

郁は、小首を傾げ表紙を見る。一方、柴崎は表紙を見るなり、なるほど…と感心したように相槌を打つた。

「その本、今、人気急上昇のやつね」

「そう！しかも、これに出てる女の子が笠原にそっくりなのよ」

「へ」

「そういえば、他にも似てるって言つてるの聞いた事あるわ」

郁は、そうなの？と、同期が持つっていた本を受け取り表紙をじつくりと見る。

そして、

動きが止まつた。

小さく瞳^めを見開き、表紙を…いや、表紙に書かれた著者の名を凝視

する。

「その作家さん、確かに亡くなってるのよねー」

近くにいるはずの同期の声が遠くで聞こえる。

郁だけ、時間が止まったように動かない。動けない。

それほどの衝撃だったのだ。

「笠原？」

突然、表情をなくした郁に柴崎がいぶかしんで声をかける。
その呼び声に、郁は我に返ったように顔を上げ、えへへと無理やり
作ったような笑みを見せた。

「じ、じゃあ、これ借りようかな。手続きできる？」

取り繕つたような郁の態度を不振に思いつつ、柴崎は手続きをする
ためにカウンターへと足を向けた。

本を借りた郁は、中庭のベンチに腰掛けていた。

そして、手には借りたばかりの本が1冊握られている。

ゴクリ、と喉を鳴らし、数回深呼吸をした後、表紙を開いた。

私の中で、あいつとの出会いは本当に特別だった。

そんなフレーズから始まっていた。

郁は慎重に、一文字も読み飛ばさぬよう読み始めた。

どんなに時間が経つだろう。

数分だろうか、数時間だろうか。

読み進めていくうちに郁の頭がどんどん伏されていく。そのうち、鼻を啜る音が聞こえ始め、ついには、噛み殺した様な嗚咽が漏れ出した。

視界が歪み文字がぼやける。その度に、瞳を擦る。

だが、涙は止まる事を知らないように流れ続けた。郁は、等々、読むのを止めてベンチの上で膝を抱えて顔をジーンズに押し付けた。押し付けられたジーンズに涙の後が広がる。

「ふ・・・う」

知らなかつた。知らうと思えば知りえた事なのかもしない。こんなのも、こんなにも、あの人は温かいのに。優しいのに。こんなにも想つてくれているのに…

自己嫌悪と後悔が郁を襲う。

「なにを泣いている？」

唐突に頭上から聞こえてきた声に顔を上げた。

その郁の顔は涙と涙を止めるために擦つた手によつて、グチャグチャになつてゐる。

「きょ…官？」

そこには、特殊部隊の制服に身を包んだ堂上が立つてゐた。

堂上は、ヒドイ状態の郁に顔を歪める。

泣く理由を強く問質したいのを我慢し、つとめて平静な声で問う。

「で、お前は、公休の真昼間から何を泣いてんだ？」

「教官こそ、制服…」

郁は、堂上の質問に答えず、自分と同じく公休のはずの上官に疑問をぶつけた。

その言葉に、一瞬、眉間に皺を作つた堂上だが、次には、大き

く息を吐き出した。

「俺はな、あの隊長の丸投げ書類の処理」で、お前は？と、堂上は今度は郁を促した。郁は、上げていた顔を再び伏せ、ポツリポツリと話し始めた。

「この本、読んでたんです」

郁は持っていた本を堂上に差し出した。

「これ…この本…」

話そうとしたが、再び、嗚咽がきて声が途切れる。

堂上は黙つて、ハンカチを取り出し郁に差し出す。郁は、少し躊躇したが、ありがたく受け取ると消え入るような声で礼を言い涙を押し付けるように拭いた。

堂上は郁の隣に腰掛ける。そして、伏された郁の頭を軽いタッチでポンポンと優しく叩く。

それは、郁が落ち着くように。優しい衝撃だった。

郁は、単調に続く堂上の手が心地よく、グズグズになつていて感情が治まつてくるのを感じる。

落ち着いた郁は、深く深呼吸を数回すると、今度こそ話し始めた。

「この本、私の中学の時の先輩が書いたんです。私知らなくて…同期の子に、私みたいなキャラが出てるって聞いてビックリしました。読んでみたら、もつとビックリ」

「ビックリ？」

堂上がさりげなく合いの手を出す。その間も郁の頭に乗せている手は止まる事はない。

「これ、半分以上が実話なんですもん。…私、中学に入学した当初は、まだ陸上してなくて、色々な部活を覗きに行つたり図書室の本を読み漁つたりしてたんです」

その頃から、馬鹿みたいに身長がデカかつたんですよー、と涙に濡れた瞳で笑つてみせる。

「ある日、図書室で本を読んでいたら声を掛けられたんです。『姿勢がキレイね』って…そんな事言われたの初めてで照れたのを覚え

ています。それが、先輩と話すようになつたキッカケでした。先輩と話すの楽しかつたなあー。落ち着きのない私の話も、ちゃんと聞いてくれて・・・なんの部活に入ろうって話した時も先輩が、『笠原は姿勢がキレイだから陸上にしたら?』って。姿勢と陸上の関係性が分からなかつたけど、『きっと、フォームもキレイだから』ってススメられて、始めたんです、陸上。今の笠原を作つた恩人の1人です。・・・勿論、堂上教官もですよ?』

「お伊達はいらん」

で?と、郁に続きを促す。

「陸上を始めて半年くらい経つた時かな、先輩に転校するって言われて、そこで初めて先輩が難しい病気だと知つたんです。いつも笑つて全然気付かなかつた。気付かせてもらえなかつた」

「その先輩は?」

「アメリカに。治療は向こうの方が良かつたらしくて。それから、先輩とは会つてなかつたんです。先輩が...先輩が亡くなつてゐるなんて知らなかつたツツ!!!」

最後は悲鳴のような声になつた。引っ込んでいた涙が、再び流れ出す。

「知らうとしなかつた!違う!私は忘れてた...あんなに良くしてもらつたのに、あんなに大好きだつたのに...最低だ、私

「それは、違う」

力強い声が否定する。

「どうして、そんな事が言えるんですか...」

「今、ちゃんと泣けてるだろ?。それは、その先輩が好きな証拠だろ?」

「悲劇ぶりたいだけです」

「悲劇ぶりたい人間は、そんな事は言わない」

「どうして、分かるんですか!」

「分かる!伊達に、お前の上官をしていない。上官としての俺をみくびるなよ、お前。部下を把握してなんぼだろ?が。だいたいな、

いくら親しい間柄だろうが、離れて暮らしていたら忘れるもんだぞ。四六時中、覚えていいる方が怖いわ。人間というのは、環境が変わると、それまで主体だったものが変わるだろう。臨機応変って言葉もある事だしな。お前は、今、その先輩を思い出しているし亡くなつた事も悲しめてる。だから、最低だなんて言つたな。それこそ、お前の事を書いた先輩に失礼つてもんどう」

堂上は、いつも間にか放していった手を組み、ベンチに深く座り直した。

ポカーンと堂上の話していた郁は、ベンチの上に乗せていた足を降ろし、軽く腰を捻つて堂上に向ける。

「本当に、そう思いますか？」

「おう」

そう断言する堂上の言葉に安心する。

間違つた事は違つといつ堂上だから。真つ直ぐで尊敬出来る背中だから。

だから、安心出来る。

エヘヘと笑つて、持つていたハンカチで鼻をかんだ。

「あ！これ、堂上教官のだつた！すみません、洗つて返します」

「アホウ」

涙の止まり、あわあわする郁に堂上は苦笑した。

「あーらー、教官が笠原泣かせてるー」

いーけないんだー、と笑い含んだ柴崎がすぐ近くに立つてゐる木陰から顔を出す。

「しばー！」

2人は、突然湧いた柴崎にギョッとする。

そして、微妙に近かつた身体同士の距離を取つた。

「違つて、し、柴崎！あ、もつ、お昼う？」

郁は、話題を変えるために、腕時計を覗きながら立ち上がる。

柴崎も追求する事なく郁の問い合わせに答えた。

「そ。休憩になつたから、誘いに来たつてわけ……あ、そうだ。教官もいかかですか？」

基地の近くに出来たカフェなんですけどー、と付加える。
普通なら、こんな場面に出くわして、からかい倒すのが常の部下だと知つているだけに、柴崎がこの状況を追求しないのはおかしい。だが、昼飯だー！と、笑顔を見せる郁に油断した。

「ああ、たまには良いな」

「そうですか」

柴崎は、唇に指を当てて、魅惑的な笑みを浮かべた後、徐に（おもむろに）郁に声を掛ける。

「笠原ー、堂上教官がお昼ご馳走してくれるのでーー」

「ツ馬！」

「えー、本当ですか？」

物凄い期待の眼差しに何も言えなくなる。

「ああ、良いぞ。食え食え」

もう、諦めの境地だ。あの笑顔を突つ撥ねれる人物がいるならお目に掛かりたい。

堂上は、立ち上がり歩き出した。

私が死ぬまでに何かを残したい。

だから、私は私を残す事にした。

そう考え付いた時、あいつの事を思い出した。

あいつと過ごした時間を書いてみるのも悪くない。

そう思つて、これを書き始めたの・・・

あとがきより抜粋

終

このタイプ？（前書き）

戦争→革命の間

堂郁風味と見せかけて手柴…堂上班 + 柴崎

心のタイプ？

「あんたは、普通の工口ね。それはもひ、ショボイと言える類の工口ね」

共用スペースの一角を占領していた柴崎は、たまたま新聞を読みに来た手塚を見つけるや否や、とんでもない事をスッパリと言い切った。

共に一緒にいた郁は「え、そうなの…」と素直に信じる。

柴崎の突然の言い草に新聞を持つて固まってしまった手塚は、その言葉を理解した途端に顔が歪む。

「なんだ、それは！」

「いや、雑誌に書いてたから」

柴崎は自身が読んでいた雑誌を手塚の方へ向けて見せる。
そこには、『女の直感は当たる！あなたの近くの男性の工口度はあなた次第！』という文句が書かれていた。

それを見た手塚は、今度はひくひくと顔を引きつらせた。

「なんかさー、この雑誌によると、女がイメージした工口は大抵当たってるらしいのよ。だから、あんたは普通の工口」

「何を根拠に…」

「知らなーい。面白いから」

「面白がるなよ」

手塚は椅子を引いて力なく、そこにへたり込んだ。

この女に勝てる気がしない。

「でさでさ、本当なの、手塚？」

郁がキラキラした瞳で手塚を見る。なんだか期待に満ちている。

「そんなわけ…！」

「あーら、だつたらどうなのよ」

「ヤニヤ顔の柴崎が否定の言葉を吐きつとした手塚を追い詰める。

どうだと言われて、自分の口を加減を説明出来る男がいるとした
ら、それを売りにしている芸能人か変態か、それを楽しめる人間し
かいない。

手塚はそれのどれにも当て嵌まらない。

「笠原、きっと手塚はいまどきの中学生でも見せない反応で口本
にドキドキしちゃうのよ。破廉恥だ、このやるー的にドギマギしな
がも目線を外せずに赤面よ」

破廉恥つて、どの時代の言葉よ、と笑う柴崎の言い草に郁は手塚を
哀れみのような顔で見る。

「うーわー」

「勝手に不審な人物にするな！笠原も信じるなよ」
もう泣きたい。なんだ、こいつらは…どんどん脱力する。
だが、そこに救いの手が差し伸べられた。郁が自分から話題を変え
たのだ。

「じゃあさ、他の特殊部隊の面々では？」

「特殊部隊ねえ…例えば？」

「た、隊長とか？」

「あれば清純派工口ね。見た目とのギャップが激しいタイプ」

「進藤一生」

「正統派工口。自分の口をちゃんと理解しているタイプ」

「緒方副隊長」

「これも清純派。好きな相手の手を握るだけで、いっぱいいっぱい
のタイプ」

「…なんか意味がイマイチ良くわかんないけど、スラスラ出てくる
もんだね」

当たつてんの？と郁が小首を傾げる。

「知らないわよ。ただのイメージだもの。ってか、あんた意味も分
からないのに聞いてたわけ？お子様には既にハードな内容だったか」

「うッさい…」

呆れた様に言う柴崎に郁が囁み付く。

見事な乙女思考には柴崎の工口談は理解不能だつたが、雰囲気的には楽しいのだ。

楽しいだから良いじゃない、という郁に柴崎は、意味も分からぬのに?と切つて捨てた。

隣で聞いていた手塚は、もはや新聞の読める状態ではない。郁の乙女っぷりにも引くが、尊敬する上官相手に言いまくれる柴崎にドン引きだ。

「イメージだけで上官相手に、よくそこまで言えるな」

「表現の自由よ」

しつれつと言われてしまえば、それまでだ。

「…………もう、俺は何も言わん」

「楽しそうだね。何の話をしているの?」

背後から柔らかい声をかけられ、振り返ると入浴後なのか濡れた髪を拭く小牧本人が立つていた。

「あ、小牧きよーかん、お風呂ですかー?」

「うん。で、何の話をしてたの?」

小牧は相変わらずの笑顔で近付いてくる。

郁は柴崎から雑誌を借り受け小牧の前に翳して見せた。

「この雑誌を見てたんです。皆のタイプはどうだらーつて」

小牧は雑誌を見ると軽く吹いた。ちょっとだけ上戸に入ったのだ。

「これはこれは……」

「私には意味が理解出来ないんですけどー」

「お子様乙女ですかねー」

「だーまーれ!で、柴崎が言つには、手塚は……なんだっけ?しょぼい工口?で、隊長と副隊長は清純派で進藤一生は正統派らしいです今度こそ本当に小牧は、ブツという吹き出しと共に上戸に入った。テーブルに突つ伏してヒイヒイと言つてる。言い当たが絶妙だつたのか、当たつて、という言葉を笑いの間に付け加えるのを忘れな

い。

「ククク…俺のタイプは話した?」

笑いを含ませながら言つ。とても楽しそうだ。

「いいえ、まだです」

「俺つてどんなタイプに見えるのかな?」

柴崎は小牧の顔をジーと見ながら、そうですねえ、と考える仕草をする。

だが、考えたのはホンの数秒だ。真顔でイメージを言つ。

「小牧教官は…魔王です」

柴崎の言葉にそこにいた3人が声を合わせて、魔王?と聞き返した。郁と手塚に至つては、その頭上にハテナマークが乱舞している。変な所で似ている2人だ。

「無礼講でお願いしますねえ…一見、爽やかに見えるその外見の内には有象無象のエロを秘めて…とか如何でしょ?」

「それは褒め言葉で受け取つて良いのかな?」

笑顔の小牧に対し、柴崎も魅惑的の笑顔を返す。

似たもの同士の会話ほど、底が見えなくて恐ろしいものはない。

郁と手塚は、ぞぞぞと悪寒が走つたような気がした。

「もちろん。あ、ちなみに堂上教官は

「ムツツリ」

今度は小牧と柴崎の言葉が重なつた。

そして、次の瞬間には2人して上戸の嵐だ。

「ククク…やつ…ぱ、り!柴…崎さんもそ、う思つ?」

「あれは、ムツツリ以外ないと想いますよーーもうアレはムツツリ王子です!」

「おお…じー!ムツツリ王子!…ブハツツ!…アハハ…ひいツ」

腹が痛いと小牧がのたうつ。

置いてけぼりの郁と手塚は突然話題になつた堂上が、ビリして『ムツツリ』と評したのかが分からぬ。

上戸状態の2人を啞然と見る。

だが、ただ置いてけぼりで進んでいくのは面白くない。

「ちょっと、なんで堂上教官が、ム、ムツツリなのよー。」

「あーら、知りたいの？」

「知りたい！」

まだ、柴崎は零れる笑いをどうにか噛み殺し、郁に教えてあげるから耳を貸してと、どこなく意地悪い笑顔を向ける。

そして、内緒話宣しく、耳元でその所以を言って聞かせた。聞いていく内に、郁の顔が青くなつたり、赤くなつたりと変化する。最後には涙目だ。何を聞かされているのやら。それを見て、また小牧が上戸に入る。

手塚は迷子だ。

旗から見たら、上戸と下戸との和やかな談笑だつが、その真実は地獄絵図だ。

そこに何も知らないムツツリ王子…いやいや、堂上が財布を持って現れる。

なんとタイミングの良いといふか間の悪いと言つた。

「お前ら何をしてるんだ？」

堂上の登場に、小牧の上戸に拍車が掛かる。

そして、郁は「ひいツツ」と悲鳴を上げ、座つていた椅子から音をたてて立ち上がつた。

その顔は真つ赤で涙目だ。

「笠原？」

どうした、といふ台詞を言つ前に、郁は「恐ろしいー」という悲鳴ともつかない言葉と共に脱兎の如く逃げ出した。

残された堂上は怪訝な顔をするだけだった・・・。

小牧と柴崎のフォローが入るまでの数日間、堂上は郁に去えられるのであった。

終

「お前ら、笠原に何を吹き込んだ！ 怖えた小動物のよつな瞳で見てくるぞ！」

という堂上の困惑が、フォローきっかけになつたとかならなかつたりとか…

なんか、最後とかグタグタになつてしまつた（汗）
どうでしょ？

抱きしめて（前書き）

別冊？以降 堂郁結婚後
妊娠表現あり。

抱きしめて

だるい。

このだるさを初めに感じたのはいつだつただろう。

一週間・・・もつとかもしれない。

最初は、あれ、おかしいな程度だつた。時々、思い出したかのよう
にだるさがやつてくるだけで、凄く体調が悪くなるわけでもない。
だるさと共に微熱も続いていたが、周囲にはバレてないと思つてい
たし、仕事に支障はきたしていない筈だ。

そんな郁の体調の異変を夫であり上官の堂上篤は薄々おかしいと感
じてはいたが、堂上が「大丈夫か?」と尋ねると、必ず、「大丈夫」
という返事が返つてくる。

日常の訓練・業務等の問題なくこなしていた。
だが、おかしい。

そう思いつつ、決定的なものがなく、「大丈夫か?」と尋ねる事し
か出来ない。

だが、郁は今、ダブルのベッドを一人で占領して瞳だけ^めにして頭上
の人物を見ていた。

「いつからだ」

心配そうな顔の堂上が、自分と郁の額に掌を乗せて温度を確かめる。
郁は、少し低めの体温から感じる心地よさにうつとりと瞳を細めた。
堂上は、郁の落ち着いた様子に、微熱だな、とひと安心の溜息をつ
いた・・・

早朝、郁は気分の悪さに起きてしまつた。

堂上を起こさないようにベッドから抜け出そうとしだが、突然、襲
つてきた嘔吐感に郁は、上布団を引っ張る形でベッドの脇にへたり

込んでしまった。

その為、堂上を起こしてしまった事になる。

堂上は、何事かと起きるとベッドの脇で口を抑えて縮こまる郁の姿に、言葉通りに飛び起きた。

「郁！」

あつしさん…声にならない。代わりに、涙目で堂上を見上げる。くぬじこ。

「どうした？」

郁の傍らに膝をつき、その背を優しく摩る。

震える声で、「気持ち悪い」とだけ答えると嘔吐感を我慢している代償の様に大粒の涙が出た。

堂上は、郁の抱え上げると、そのままトイレへと連れて行く。その足通りに不安はない。

「吐いちまえ。ほら、郁、我慢するな

「む…こ…い…て」

汚い、と涙を流す郁に堂上は肩を抱いて諭すように囁く。

「アホウ。お前をほっとけるか。俺が気にならなく、あつち向いてるから吐け」

そう言つと、今度は背中をポンポンと叩き、郁を促した。

おおかた吐ききつた郁は、幾分楽くなつたきた。

今度は自力で立ち上がる振り返ると、まだ心配顔の堂上と瞳^{むな}が合つた。

まだ、額いっぱいに汗を後を残す郁だが、その顔から苦しそうな色が消えているのに安堵する。

一步踏み出した堂上は汗で貼りついた郁の前髪を梳ぐと「うがいするか?」と問う。

口の中の不快感に、郁は素直に頷いた。

促されてキッチンで過機能がついた蛇口から水をグラスに注ぎ、

不快感がなくなるまで数回うがいを繰り返した。

落ち着いてしまえば、今度は居心地が悪い。

いつの間にか、不機嫌顔に大変身している堂上を前にしているものだから余計だ。

郁は、堂上に促されると、有無も言わぬうちにベッドへ寝かされた。

そして、今に到る。

「う～、ここんとこ、疲れが溜まっていたのかな…ちょっとね、だるかったの」

おどけて言つと堂上の眉間の皺を増やし、郁に乗せていた手で額を弾く。

「俺を殺す気か、まつたく！健康管理を怠りやがって、馬鹿。明後日から奥多摩だぞ、今日は大人しく寝てね」

「「めんなさい」

郁は、素直に謝ると眠りに落ちていった。

落ちていく意識の中で、郁は、「心配させるなよ」とこつ堂上にしつては、弱々しい声色で呟く声を聞いた気がした・・・

チャイムの音が聞こえる。

徐々に覚醒していく脳が誰かが部屋に入つてくる音を伝えてくる。

「かさはう…？」

薄く瞳を開けると、そこには見慣れた美女がいた。

「しばわき」

柴崎…もとい手塚麻子になつた新妻は、郁の目の前で携帯を振つて見せた。

「堂上教官から様子見てくれつて頼まれたのよ。どうなの？」

「眠い」

「気分は？」

「んー、悪くないよー。お腹すいたし

「起あらわるよつまひこひしあい」

「麻子様が何か作つてあげるわよー、とウインクを残すとベッドルームから抜け出した。

さつキッチンへと向かつた。

キッチャンでは、自分の家から持ってきたのか、堂上家になかった食
材がいくつかある。

「なに、作ってくれるの？」

姿を見る。

からひやうせんじてつ。

一 野菜スープとオムライス

「わあ！ おしゃれ！」

野菜が出て美味しいはずよ」

わくわくとした気分で料理が出てくるのを待っていたが、いざ目の前に並べられ、その匂いを嗅ぐとさつきまであった食欲が一気に失

その代わりに、また軽い嘔吐感が襲つてきた。

- ८८ -

「良いわよ！でも、野菜スープは食べなさい。何か胃に入れた方が良いわ。で、病院行きましょ」

病院
?:

「質問しまーす。体がだるいと感じたのはこいつからですか?」

「え、なに、急に」

四三一
一四四

「食慾が止まらない」と前がモヤモヤ

「ある日とない日が差が激しいかも」

「嘔吐感はあるわね。次、生理は順調にきていますか？」

「えつと…あれ…ちょっと待て…あれ…一ヶ月くらいきてない？」

初めは気付かなかつた柴崎の質問の意図をいくら鈍いといつても気付く。

それだけに戸惑いが強くなつた。

「まさか」

「そのまさか、よ。けど、確信も持てないから、ちゃんと検査しますよ」

ほら、少しは食べなさい、と柴崎は自身の食事を再開した。匂いに嘔吐感が込み上げてきた郁だったが、ひとくちスープを啜るとその野菜とスープの甘味が自分が空腹だったのを思い出させた。ひとくち目がキッカケだったのか、一口三口と食が進み、柴崎が用意してくれたスープを間食してしまつ。

そして、一服したのち、ラフな服装に着替え、図書基地玄関に呼び付けたタクシーに乗り込んだ。

病院は基地は歩いていける距離だが、今回は大事をとつてのタクシード。基地近くの総合病院に着くまでの間、もんもんとした気持ちが増して頭がグルグルする。

怖い。
もしかして。

期待と不安。それが、同時に襲つてくる。

どうしていいか分からず、郁は意味もない話題を柴崎に振る。

がしかし、話が続かず反対に柴崎に「落ち着いたら?」「と言われる始末だ。

これが落ち着ける状態か。
だが、そう言われてしまつと黙るしかない。

病院に着くと直ぐに受付を済ませた。

幸い他の患者は少なく、一時間待たされた程度で診察室に入れた。

柴崎は受付にある雑誌に手を伸ばしながら、待つているわと手を振る。

ちょっとだけ、後ろ髪を引かれる感じはしたが、看護婦に促されるまま付いて行き検査が始まった・・・

「ほり、泣き止みなさいよ」

だつてえー、と顔から鼻水と涙を駄々漏れさしている。

検査を終えた郁は、柴崎の顔を見た途端、放心していた思考が戻つてくる。

みるみる内に顔が歪んでいき、柴崎に抱きついて子供の様にわんわんと泣き始めた。

柴崎は、背中をポンポンとリズムをつけて叩き、病院に備え付けられているカフエへ移動する。

その時も、ずっと柴崎に抱きついたままで引き摺られる様に歩く。デカい子供だ。

無理矢理、座らされた後、柴崎はその前の席へ腰を落ち着け、すぐ来たウエイトレスに郁にオレンジジュース、自分にコーヒーを頼んだ。

「おめでとう、で良いのかしら?」

「ありがとう!!!」

それだけで答えが分かった。

「今、何週目?」

「えつと…5週目に入ったとこだつて。あー篤さんに知らせなきや！」

いそいそとバッグから携帯を取り出そうとした郁を柴崎が止める。

「こら。そういう事は、本人を目の前にして言つてやんなさい。あの人絶対、泣いて喜ぶわよ」

携帯を握り締めて頬を染める郁を微笑ましく見やりながら肯定する。ついでに、病院だからと携帯の電源を落とすよう言つ。

郁は柴崎の言われるがままに電源を落とすと血頭のお腹に触れながら呟いた。

「喜んでくれるかな」

「会つたり前でしょー。呪泣よ呪泣。あ、けど、悔しいなあ、絶対、子供を同級生にしたかったのにー」

「ええツツ！」

そこに、注文した飲み物が届けられ話が中断する。が、郁は驚いたままだ。

柴崎は、そんな郁を置き去りにして「コーヒーにミルクと砂糖を入れながらしつと言い放つ。

「私、後2年は2人で過ごしたいのよ。あんた、次は2年後に作りなさい」

「何を言つ…」

「想像してみなさいよ。私とあなたの子供が同じ年で仲良くしていふとこを」

郁は、ちゅーとジューースを吸いながら、一生懸命想像を膨らます。一緒に保育園、一緒に学校、ご近所の幼馴染み…しかも、それが親友の子供、たまらなく楽しいかもしれない。

「たまらん…！」

「でしょーが！だから、2年後よ2年後」

「あ、篤さんに相談しとく…」

「よし…」

柴崎は郁の返事に満足して、落ち着いた事だし帰ろつか、と席を立つた。

「市役所寄つて帰るわよー」
「え、なんで？」

「母子手帳いらないわけ？」

「あ、いる…」

帰りもタクシーを使い市役所経由で基地へと戻る。家を出てから4時間が経っていた。

郁は足取りを軽く、やや弾んだように歩いて官舎に向かう。徐々に近付く官舎の前に人影がある。それは仁王立ちして待ち構えていた。

堂上である。

「あれ…あつしさん？」

「あらら、お出迎え」

にんまり顔の柴崎とは反対に、堂上の顔は心配を通り越してイラついている表情だ。日頃の皺より今は深く眉間に刻まれている。目の前に郁に来るのを待つてから怒鳴った。日頃の訓練の賜物だ。その声はデカくて鋭い。

「携帯の電源も入つていない！待つても帰つてこない…どこに行つた！」

「ええ、携帯…あ！切つたまんまだつた」

「柴崎も、なんだあのワケ分からんメールは！」

『笠原が大変な状況です』

柴崎は市役所から帰る前にそう堂上にメールを入れ、電源を切つていたのだ。

そんなメールをいきなり送られた堂上は意味が分からず、すぐさま郁に掛けたが繋がらない。もちろん、電源を落とした柴崎も繋がらなかつた。

心配と動搖が堂上を襲う。

一度は落ち着こうとしたが、今朝方の郁の様子が頭を過ぎり落ち着ける状態になれない。

定時には、まだ少しあつたが、堂上は緒方と小牧に断りを入れて早

引きして今に到つてゐる。

郁の帰りを待つ間、生きた心地はしなかつた。姿を見て緩んだ感情が怒鳴りとなつたのだ。

「教官、心配させたのはすいません。けど、怒鳴らないで下せ」

「柴崎はちょっとやり過ぎたかと内心、思いつつ素直に謝る。

「笠原、私行くから。体、冷やすんじゃないわよ」

そして、郁にそう告げると失礼します、と自身の家へと歩き出した。

残された郁は、幾分しゅんとしている。

怒鳴つた堂上はちょっとバツが悪そうに頭を搔くと、今度は小さく告げた。

「心配した」

「ごめんなさい」

「どこ行つてた?」

「えつと、あのね…」

「ん

「篤さん、ギュッとして

「は?」

「いいから、ギュッとして」

突然の申し出に、どこでか?と戸惑いを見せる。

いつもの郁なら、恥じらいが強く人前でこうつたコヨニケーシヨンを強請らない。

「今、ギュッとして欲しい」

だからこそ堂上はそう望む郁の要望に答えた。

彼女がちゃんと感じるよう少し力を入れて抱き締める。

郁は堂上の肩に顔を埋めて力いっぱい堂上の香りを嗅ぐ。

安心する匂い。堂上の匂い。

大好きな人の匂い。

「篤さん、あのね…柴崎と病院行つてきたの」

郁の口から出た単語に心配が再び芽を出す。

「なんかあつたのか?」

「あつた。結構、ヤバイこと」

「郁？」

郁は堂上から身体を離すと、バッグの中から一枚の手帳を取り出した。

「柴崎に感謝しなきや。」そのまま知らなかつたら明後日からの奥多摩で大変な事になつてた

「本当か」

「うん、5週目に入ッ・・・」

郁が言い終わる前に再び強く抱き締める。

「なんか、色々言いたいのに嬉し過ぎて言葉が出ん」

「嬉しい？」

「ああ、嬉しい」

「もつと抱き締めて。篤さんの温もりがね、たくさん言葉を伝えてくれるの」

（後日談）

柴崎の同じ年計画。2人目は2年後に作れといつ事を伝えると堂上は苦笑を漏らしたらしい。

のちに出来るであろう女性隊員のために初女性特殊部隊員として、今後への前例を郁は作っていく事になる。

終

チヨ パンサス（前書き）

堂上 × 郁 結婚期間です。

今日は堂上より早く仕事があがつた。

4月から新人隊員の教育を担当する事になり、準備など慣れない事ばかりで自然と残業が増えていた郁にとつて、それは本当に久々な事だった。

帰つた時に家に明かりが灯つていると嬉しい気持ちになるのだが、最近はいつも堂上が先に帰つている事が多いので、愛する夫に美味しい料理を作つて帰りを待つ、というシチュエーションに顔がニヤけてしまつ。

帰宅する前にスーパーによつて食材を買い込み、堂上の好きなビールも買うのを忘れない。

ちょっと重たいが、そこは戦闘職種の力が發揮される。

レジを通し、帰ろうとした時、小さな箱が可愛い包装紙に包まれワゴンに盛られているのに気付いた。

そうだ・・・

もうすぐバレンタインだ。

また、この季節が来たのか、と自然と溜息が漏れてしまつ。

1年前はまだ堂上と結婚していなかつた。

あの時は、徳用キットカットの袋を盛つたが、特殊部隊の面々にブリーディングの嵐を頂いたのは記憶に新しい。

どう考へても、女子く男子の割合が理不尽の特殊部隊において、コンビニーチョコでさえ高額な出費になるのだ、それをあの連中はネチネチネチと…大人気ないというか何というか。

それでもやはり、日頃お世話になつている方々だ。

バレンタインは小さなお礼には丁度良い。

郁は、ワゴンをスルーすると、もう一度、店内へと足を向けた。

「ただいま」

堂上が玄関から声を掛けると弾んだ声がパタパタと足音をさせて走つてくる。

「おかえりなさいーー」

「ああ、ただいま」

「今日は早くあがれたから、腕によりをかけたんだよー！」

ネクタイを外しながら廊下を歩く堂上の後ろをピョウピョウと郁が付いていく。

そして、リビングに入ると堂上の前に躍り出て小さなテーブルへ両手を翳す。

「ジャジャーン、肉団子と白菜のスープと海老とプロッコリーの炒め物ーーこれ、ちょっと自信作。今出来たとこだから温かいうちに食べよ

「凄いな。美味しそうだ」

堂上の言葉に郁がエヘヘと笑う。そして、堂上が席に着くのを待つてから、じ飯をよそい冷蔵庫からビールを取り出した。

「はい、篤さん」

「ああ、サンキュー」

郁も席に着くと手を合わせた。ザ・合掌。

「いただきまーす」

食事が終わり、郁はリビングのソファに座り、堂上はそのままテーブルで燻製を肴に日本酒を飲んでいる。ビールから日本酒へ移行したようだ。

それを横目に郁はテレビを付けて流行のクイズ番組を流すが、テレビには一切目をくれない。その代わりに先程スーパーで買ったものをソファテーブルに広げた。

そして、気合を入れる。

「よしー！」

チョコレートのバラエティ袋を開けて、5、6個ずつを透明のフィ

ルム型袋に入れていく。

一個一個リボンを結んでいくのは、めんどくさいのでもうセロハンテープで止める。表側を花型のシールを貼つて見栄え良く仕上げれば完璧だ。

没頭して作業をしていると、いつの間に近付いてきたのか堂上が郁の腹に腕を回して引き寄せた。

「わわッ」

引き寄せられた身体は堂上の胡坐を搔いた上に座らされる。「なにしてるんだ？」

「えっと、バレンタインの準備」

ピクリと堂上の眉が動く。

「結婚したんだし、やらなくて良いんじゃないかな？」

「それは駄目。絶対、の人たち文句タラタラ言うのに決まってるもん。去年、キットカット盛りで文句言われたから今年は、プレゼント風にアレンジしてるの」

どっちにしても文句言つのはねー、とチョコを袋に詰めながら溜息を付く。

「あー、の人たちはなー」

堂上も毎年の事を思い出しながら苦笑する。

「あ、篤さんは期待しててね！今年は生チョコに挑戦したんだよー」

堂上の胸に頭を預ける形で郁が幾分声を弾ませて言つ。

「ああ、期待してる」

チョコより甘い笑顔を郁に向かた。

結婚して1年が立つが、未だに堂上の甘い雰囲気に照れる。郁は顔を伏せて赤くなつた顔を堂上から隠した。

顔を伏せたが、後ろから見る耳と首筋が赤くなつてるので赤面しているのはバレバレだ。

「郁、こっち見ろ」

郁は首を振つて拒否する。

「郁

それでも向かない郁の赤い首の裏にチュウと音をたててキスをした。

「あ、篤さん」

「やつと向いたな」

「もう！」

「ちょっと待つてろ。こっち見るなよ」

郁の頭をクシャリと撫でるとソファへと下りし堂上が寝室へと歩いていってしまった。

堂上の不明な行動に小首を曲げていると寝室のドアがカチャリと開く。その音に慌てて前を向いた。

夫の言い付けは絶対だ。

先程、座っていた場所に再び腰掛ける気配がする。

「篤さん・・・・?」

郁の困惑声を無視して堂上が郁の腰を引き寄せた。

「郁、こっち向け」

「?」

あっけを向いてろと言つたりこっちを向けと言つたり、なんなんだ
と郁が眉を顰めながら振り返つた瞬間、堂上が郁の頭をグイッと引
き寄せた。

深い口付け。

突然の事だったので郁の息が中途半端になつてしまい苦しい。
だけど、甘い。とても甘いものが口内に広がる。
その甘さを堪能しながら郁も堂上へ応えていく。
そして、ゆっくりと唇を離した・・・

「な、なに・・・チヨコ?」

荒い呼吸をしながら郁が堂上を伺う。

堂上はチヨコに汚れた郁の唇を舐めてから、郁の目の前にキラキラ
とした包装紙に包まれた丸いチヨコの入った瓶を渡した。

「え? なに、なんですか・・・?」

「バレンタインチヨコ」

「私に？」

「たまには良しとしたもんだら」

「堂上の顔と瓶を交互に見詰める。何度も見詰めるにつれて、だんだんと堂上の顔が赤くなつていぐ。
ガラじやないと照れているらしい。

可愛い。

これをどんな思いで買ったのだろう、と考へると、凄く嬉しく思つ。

「ありがとうございます。嬉しい！」

破顔した笑顔で礼を言つ、郁にまだ照れている顔で微笑む。

この笑顔だけで、こつ、恥ずかしい思いをした甲斐があるつてもんだ。

「けど、どうしたの、急に」

「なにがだ」

「めちゃくちや嬉しいけど、篤さんのキャラじやないじゃない」

郁の最もな疑問に、その時を思い出しているのか遠い目をした。

「あー、この前、隊長に頼まれて買出しに行つた日があつたわ」

「ありましたねー」

「でな、その帰りに、いきなり小牧が言い出してな。毬江ちゃんに逆バレンタインするから俺も奥さんに贈つたらどうかって……最初は断つてたんだが丸め込まれた」

「小牧教官ですかねー」

堂上が羞恥に頭をガシガシ搔いてそつぽを向いてしまつた。

それがまた可愛らしくて愛しさが増す。

男の人に可愛いって言うと褒め言葉じやないと怒るけど、可愛いって思つてしまつ。惚れた弱みか。

郁がクスクス笑いながらガラスの瓶を電気に翳し（かざ）、キラキラとした包装紙を楽しむ。

その時、丸い包みの中に一つだけ異なる形の物を見付けた。
小さな四角い包みだ。

何だ？と堂上を伺うが、まだそっぽを向いたままだ。

瓶の中から四角い包みを取り出すと、感触から、それがチョコじやな

いと分かる。恐る恐ると包みをあけてみるとそこには

「カミツレっぽいだる」

「篤さん、これ…」

細い華奢なブレスレット。パール状になつてゐる花柄の飾りがいくつも付いてゐる。

その花がカミツレによく似ていた。

堂上が郁からブレスレットを取り、郁の細い手首に付ける。

「これも？」

「たまたまだ、たまたま」

「篤さん！」

郁が堂上の首に抱き付いた。

そして、音をたててキスをする。郁からのキスだ。

いつもは恥ずかしがつてなかなか郁から仕掛けてくる事がないだけに堂上の心臓がドキンと跳ねる。

「ありがと、大好き！」

本当に嬉しいようで、その瞳が潤んでいる。

頬をピンクに染めて堂上の首に頭を押し付けて甘えてくる妻に、

「こんなバレンタインも悪くないな」

と思い、事の発端の小牧に今さらながら感謝した。

終

いつも不思議（前書き）

堂上 × 郁 新婚時代
めちゃくちゃ短いです。

いつも不思議

「ホーリー、不思議だわ」

堂上家の食卓に、今夜は柴崎と堂上班が揃っていた。

新婚生活も落ち着きを見せた堂上夫婦の元へ夕食を「」馳走になるために集まっていた。

男性陣は食より酒みたいで席に着くや否や酒盛りだ。

女性陣はそんなわけもいかなく、郁が作った料理でおもてなしだ。柴崎は自分のコップを傾けつつ感心したように呟く。心底不思議がつている風だ。

「柴崎！ 嫌なら食うな！」

「嫌とは言つてないでしょ。不思議なだけ」

「不思議つて？」

「だつてあんた、これ見て何も思わないわけ？」

「なによ」

「このなにを作ったのか、かるうじて分かる品の数々・・・なのに！味はめちゃくちゃ美味しいって詐欺でしょ、あんた」

テーブルに並べられたお皿には不恰好な物体？が乗っている。

それが何なのかは何んく分かる程度の品物である。

だが、それを食してみると、見た目を裏切る絶品ばかり、どんな調理法でこうなるのか想像も付かない。

「それ、俺も思つ」

横から手塚が郁特製キャベツのミートソース煮のよつなものを食べながら言つ。

餃子の甘酢あんかけのようなもの（しつこ）を食べた小牧も、うんうんと相槌を打つ始末だ。

全く失礼である。

「美味しいなら良じじゃない！」

「良いけど…料理つて見た目も重要だと思うわよ」

「初めて見た時、こんなものを堂上一生に食わせてんのかと心底心配したぞ」

「手塚！失礼にも程があるわ！」

プリプリと顔を膨らました郁が自身のために用意した口当たりの良いワインを一気に煽つた。

こら、郁、とそれまで黙つていた堂上が郁からグラスを取り上げる。代わりにウーロン茶のグラスを渡すのを忘れない。

「暫く、それ飲んどけ。また、倒れるぞ」

「う…はあい」

ちょっと熱くなつた内心をウーロン茶で冷やす。

食事会は始まつたところだ。まだ、寝オチするには勿体無い。

「確かに、郁の料理は見た目は凄いが美味しい。栄養面もちゃんとしている」

「篠さん大好きーッツ」

堂上が郁の頭をポンポンと撫でながら褒める。

新婚カップルは今日もピンクオーラ全開だ。

テーブル内の料理を見ていた小牧も栄養面をしつかり考えている料理に感心する。

「そうだね、俺たち体が資本の職業だけに笠原さんの料理は助かるね、堂上」

「ああ。それに、料理は俺もしてるから追々お互いが上手くなつていけば良い」

「あははー、」ちしおまー、旦那様」

「黙れ、小牧」

パクパクと見た目の悪いトマト炒めを食べながら柴崎がはふうと大きく息を吐く。

「それにしても、笠原が料理出来るなんて知らなかつたわー」

「リンゴの皮むきすら出来なかつたもんな、お前」

「うッ。い、今は出来るもん！細かい事は性に合わないの…これで

も大学時代はよく料理してたんだから！」

「大学つて1人暮らしだっけ？」

「うん。大学から近かつたから、泊まりがてらに呑みに来てた陸上部のメンバーに料理作ってたよ。よく食べるヤローに好評だつたんだからー」と血漫げに胸を張つてみせる。

が、聞きづてならない言葉を聞いた堂上は郁にツツコミが入つた。

「ちょっと待て、お前」

「んー？」

「泊まりがてらつて言つたな」

「言つたねー、どつしたの、篤さん？」

「アホか、貴様！！」

堂上の怒鳴り声に、えー、なにがあ？と郁が首を傾げる。今日も堂上家は平和だ。

終？

うかつ娘（前書き）

堂上 × 郁 新婚さん
SSS、小ネタシリーズ いつも不思議の続き？

うかつ娘

「アホか、貴様！」

先程まで自分の頭を優しくポンポンしてくれていた人物と同一人物なのかと首を傾げたくなるような堂上の変わりように郁は困惑する。

なにか、いけない事言つたかなー？

「迂闊だと知つてたけど、あんたってどんでもない迂闊娘ね」
柴崎も呆れ口調だ。

「へ？ なにが

「お前・・・」

何も分かつていない郁に手塚は何も言えない。
言えるはずもない。チラリと堂上へ視線を流すとどんでもない不機嫌オーラを纏つている。

笑い仮面の小牧でさえ笑えていないのだ。

もう、堂上が不憫で仕方が無かつた。

「あれだね。笠原さん、本当に無防備過ぎるよね、よく今まで無事にこれたよね」

「へ…無事にって？」

「だーかーらー、1人暮らしの女の子の部屋に彼氏でもない男を入れるつて、どういう了見よ。しかも、泊りつて、迂闊娘としか言いようがないわ」

やつと、みんなの言つている意味を理解して頭振つた。

「え！ や、違う違う！ 男女混合だよ、まさか私でも、そんな事しない！」

「どうしてもだ！ 無防備過ぎるだろー。」

「だつて、私だよ？それに、女の子は鍵付き寝室だつたし
「お前なあ、俺は今、心底心臓が痛いわ、阿呆」

「ええツツ」

思わず郁は堂上の心臓辺りを凝視してしまつ。
皺を眉間に寄せたまま郁の頭に手を置くとサラサラの髪を梳きながら、堂上は心配そうに言い聞かせた。

「お前と再会する前だぞ。何かあつたとしても助ける事も出来ん」「う…」「めんなさい」「ん、分かれば良い」

無防備な妻だから。

迂闊な妻だから。

自身を知らない妻だから。

心配はやまない。

だが、自分と出会いつまで真つさらだつた彼女に、
いるかどうか分からぬ神といつ存在に感謝せずにほいれない。

自分の頭に乗せられた堂上の手に自身の手を乗せて手を繋ぎ合ひつ。
お互いの顔を見て笑いあつた。

「ちょっと、手塚、私に強いお酒ちよーだいー」「

「あ、俺も俺も」

「もう、やつてられない。酔わずにほいれないつーの、早く、手塚
！」

今日も堂上家は平和だ（笑）

終

カリシント（前書き）

堂上 × 郁 革命途中
小牧さんと堂上さんの会話

久々に堂上班が当麻藏人氏の警護から解放された夜のこと。
コンコンというノックの音と共に堂上の部屋に小牧が顔を見せた。
片手には、いつもの如く半ダースのビールを常備されている。

「入つて良い?」

主の許可を聞く前に身体を部屋へと滑り込ませながらも一応、お伺いの言葉をかけるのを忘れない。

堂上はいつもの事だからと気にする事なく小牧が上がって来るのをゴソゴソとツマミをテーブルへと出しながら待つ。

小牧はテーブル越しに胡坐をかいて座ると持ってきたビールを一本堂上に手渡した。

自身もプルタブを開けて一口ゴクリと飲む。

シユワツと喉に広がる発泡感がたまらない。

「当麻先生、寮生活に慣れるの早かつたね」

「ああ。ストレスの溜まる環境だろ? タフだな」

「強い人だから、あんな話が書けるのかな?」

「どうだらうな」

当たり障りのない会話をしていた小牧がタイミングを計つたように、
ところでさ、と話を切り替えた。

「この前の笠原さんとのデートはどうだつたわけ?」

その絶妙な投下に、口に入れようとしていたスルメを見事に床へと
ポロリと落とす。

平然と「あ、落ちたよ」と言つ小牧に対し、瞬時に顔を軽く赤く染
めあげた堂上が怒鳴つた。

「だから、デートじゃないと言つただろ? がッ」

「えー、妙齢の男女が待ち合わせをして出かけるのはデートでしょ
「あれは前から約束していた事でそんなんじゃない」

「好きな子相手でも？」

小牧の直球に渋い顔になる。

茨城戦の時の郁の言葉に、まいつた、と自身の想いを閉じ込めた箱に蓋をするのを放棄して以来、彼女へ向かう気持ちを否定するのをやめた。

長年の親友にはバレバレン变化なのだろう。
だが、あのカミツレを飲みに出掛けた事柄は堂上の中では「デートではない。

なりえない。

「…お互いの気持ちが交わつてないものを「デート」とは言えんだろう。
そんなの笠原に失礼つてもんだ」

「そういう考え方をするか」

だったらやつぱり、あれは「デート」だったのだと小牧は言葉にする事なく思つ。

真面目で頑固な親友のその清々しいまでの男気に尊敬する。
「分かった。けど…堂上、お前、あんなに頑なだったのに笠原さんへの気持ちは認めたわけか

「うるさい！」

照れて怒鳴る堂上にクスクスと笑いが漏れる。

「じゃ、あれだね。勝負はこの件が終つた後だね」

「そうだな」

いつになく素直な返事に小牧は、頑張れとホール送り、自身の缶と堂上の持つ缶を「シン」と令わせ残りのビールを飲み乾した。

絶対に幸せになる2人だから 今はただ黙つて見守るだけだ

阻止せよ（前書き）

堂上 × 郁 茨城戦後 革命前

小ネタシリーズ。堂上さんが焦ります。

喉が渴いた堂上が公共スペースに下りてきた時、同期と部下が談笑しているのに気付いた。

同期はいつものジャージ姿だが、部下は外出用コートを纏っている。堂上は自販機でビールを買うと2人のほうへと歩み寄った。

「なにしてんだ？」

「あ、堂上教官！教官は飲み物を買いか？」

「ああ、喉が渴いてな…コートなんか着てなにしてんだ？」

「も～昼に言つたじやないですかー。今日は大学時代の友達の結婚式だつて。結婚式には行けなかつたけど、二次会には参加するんです」

「笠原さんはタクシーを待つてるんだよね」

小牧の合いの手に、はい！と元気良く答える。

そう言えど、今日、そんな事を言つていたよつな・・・
だが、今は7時半、結婚式の二次会にしては遅い時間なのではない
だろうか？

疑問に思つた事を言葉にしてみる。

「時間的に遅くないか？」

「挙式が3時過ぎからだつたんですね」

「だからか」

「はい。本人の顔見て『おめでとう』が言えるから、私としては嬉しいです」

自分の事のように嬉しそうに話す郁に自然と顔が綻んだ。

「よかつたな」

堂上の言葉が柔らかく、しかも、非常に優しい表情をするもんだから郁としては所謂『好きな人』に昇格した上官に、そんな表情を向けられて頬が熱くなるのを感じるつてもんだ。

顔が赤くなっているかも、とちょっと焦る。

「タ、タクシーまだですかねー」

このまま堂上を見ていたら憤死出来ると思えた郁は、ワザとじりしへ瞳を逸らし外を伺つて体をとつた。

堂上は、そんな郁を気にした様子なく、同じように外へと瞳を向ける。

「何時に呼んだんだ？」

「えっと… 7時40分です」

だったら、もうそろそろだな、と言おうとした時、女子寮の方からパタパタという小走りの足音が響いてきた。

「あ、良かつた！ 笠原、忘れ物！」

女子寮に続くドアから顔を覗かせた柴崎は、男の拳ぐらにあるバラの形のコサージュを持っていた。

「あ、着けるの忘れてた！」

「間に合つてよかつたわー。私のコーディネートが損なわれるところだつた」

柴崎は早足で郁の元に行くと、コサージュに付いている小さな安全ピンを外す。

ほら、コートを脱いでと促され、それに従つて郁はコートのボタンを開いた。

そこから覗いたハイネックの部分に慎重にコサージュを付け終ると同時に郁の背後にいる上官たちの存在に気付いた。

「あら、教官方いらっしゃったんですね」

なんと失礼な言い方だろう。

だが、そんな柴崎に慣れている2人からは苦笑に近い笑いしかでない。

小牧は腕時計を伺いながら口を開いた。

「もうすぐタクシーが来る時間だよ。間に合つてよかつたね」

「ホント助かつた。ありがと、柴崎」

「明日の食堂ランチ奢つてよ」

「うー、わかつた」

お礼だ！と郁が胸を叩く。

その時にまだ、閉めてなかつた「コートから「コージュ」が揺れるのを見つけて柴崎は、チシャ猫のような笑みを浮かべた。

「笠原、あんた、教官たちにドレス姿見せたの？」

「ううん」

笠原の否定の声に心が笑う。

まだ見ていないから、あの過保護過ぎる上官が平静でいられている、というわけか…柴崎は堂上を盗み見てほくそえんだ。

これから見せてくれるだろう反応が楽しみだ。

「え、その下、ドレスなの？」

小牧が意外そうに聞いてくる。

「ブーツだから違うのかなって思つてた」

「一次会だから、少しカジュアルにしてみたんです」

柴崎が郁のコートを引っ張つて脱ぐよう促す。

それに素直に従つた郁がコートを脱いで見せると、ハイネックな衿元から裾に向かつて広がるフレアがエアリーな印象を与える薄い桜色したシフォンワンピースが姿を現した。

肩のラインを綺麗に見えるノースリーブタイプで、ウエストのリボンがアクセントになつていて。

やや着丈が短いが、郁の足の長さを引き立てている絶妙のラインを誇り、黒のロングブーツを合わせる事によつてカジュアルに見せていた。

「わー笠原さんキレイだね」

小牧が郁の姿に賛辞を述べる。

だが、堂上は自身のビールに口を付けたまま動きを止めた。

キレイだと思つ。

似合つてゐるとも思つ。

だが、ちょっと…非常にスカートの丈が短過ぎではないか？

頭の中で言葉が渦巻く。

だが、それが言葉にならないのは堂上が郁のその姿に見惚れているからだ。

彼女のこんな姿を見るのは、痴漢騒動以来だ。

「しかも、これだけじゃないんです」

ふふふと含み笑いを見せた柴崎が郁に「はい、ターン」と掛け声をすると、慌ててそれに従つ。

くるりと回つた郁に今度は口に含んでいたビールを拭いた。

「おま、それ…！」

少し気管に入つたらしく咳が込み上がる。

郁が突然、咳き込みだした堂上に大丈夫ですかツツ？と声をかけてくるが大丈夫なわけはない。

忌々しい咳が邪魔をし、アホか、貴様！という口癖を声にする事が出来ない。

ゴホゴホと咳を数回繰り返した後、何とか息を整え口を開こうとした瞬間に柴崎によつて遮られた。

「あら、笠原、タクシー着てんじやない？」

「わわわ！本當だ。じゃ、行つてきます！堂上教官も小牧教官も失礼します！」

コートを引っ掴んで玄関を慌てて出て行く郁に、待てーと堂上が止めるが聞こえなかつたようで無残にも堂上の言葉だけがそこに残された。

「笠原、無駄な贅肉がないから背中もキレイなんですねー」

楽しそうに言葉を紡ぐ。

郁のドレスは背中部分が大胆にもざっくりと開いていた。

形の良い肩甲骨と背中のラインが丸見え状態になつていたのだ。

「うん、キレイだつたね。けど、あそこまでサービスする事ないんじゃない？」

「あら、小牧教官知りませんですか？結婚式の一次会つて合コンみたいなものなんですよ。帰つてくる頃には彼氏というものが出来てるかもしませんよー」

ワザとらしく挑発するよつと云つ柴崎の意図に早々に気付いた小牧が笑いながらそれに乗る。

「わ、それは大変だね。笠原さんはそれを理解してるの？」

「まさか。あの純情乙女が知るはずがありません」

「それにしても、よくあのドレスを笠原さんが着たね」

「今度、リファレンスの勉強に付き合つのを条件に着させました」

「あははは・・・笠原さんらしい」

放心に近い状態で固まつていた堂上が、柴崎と小牧の会話を聞くなり、物凄い形相でポケットに入れていた携帯を取り出した。

迷う事なくその番号を呼び出す。

数回コールの音が響き、まだタクシーの中であらう郁が遠慮がちな声で出た。

「・・・言い忘れていた事がある」

堂上の電話の向こうから微かに郁の声が漏れ聞こえた。

「今日は呑むな」

突然の言い草に文句を言つてるのであらう郁のキヤンキヤン吼える声が聞こえるが堂上が一喝する。

「うるさい！寝オチでもしたらどうするー！」

そこまで呑みません！と噛み付くが、今の堂上は理不尽でいっぱいだ。

教官、横暴！と郁の叫びに、グッと喉を詰ませた。

自分が郁の行動に制限を付けて良い間柄ではないと分かっている。

彼女は大人の女性で、彼氏を好きに作る権利もある。

だが、なんと言わようと今、堂上は自分の行動を止めようとはしない。

なかつた。

「じゃ、一杯だけ許す。その代わり、迎えに行くから帰る時、連絡

寄越せ」

妥協案を提示するが、それが不自然である事を自覚しているだけに堂上の声が弱い。

だが、堂上に恋する乙女は分かるはずもなく、動搖ありありといつた感じで遠慮する郁に、堂上は「上官命令だー」と言つて電話を切り逃げした。

その様子に上戸に入つていた小牧に柴崎が問いかけた。

「なんか、堂上教官変わりました?」

「どうも、茨城で思つてこいつがあつたみたいだよ」

「やつとですか」

「やつと、だね。まあ、これからもおつかづだけ良こ傾向じゃない

?」

「楽しみですねー

終

HN様って何ですか？（前書き）

ずっと気になっていた手塚君の話…なのか?
堂上×郁前提 革命後SSS 小ネタシリーズ

王子様って何ですか？

「堂上の退院が決まつたな！」

デスクで玄田が豪快に笑いながら隊員たちに声を掛けた。

事務所に集まつていた面々が、隊長の言葉に嬉々として乗つてくる。

「どうも、堂上がいないと物足りないですからね」

「それに、隊長」

進藤がトム笑いをしながら含んだように玄田を呼ぶ。

「やつと、うちのお姫様と付き合つようになつたみたいですし

「いや～、長かつた！」

進藤の言葉に隊員たちがニヤリと笑う。

「王子様は頑固だからなー、お姫様が好きなくせに…付き合つまで

4年？マジで長かつた」

「王子様のオトコゴコロは複雑だから？」

そこで大笑いが発動された。

今までの堂上は郁に対する想いを頑なに認めようとしなかつた。

そのじれつたい日々を間近で見せられていた隊員たちは、彼らの進展が嬉しくもあるが、晴れてお姫様を手に入れた男に対して意地の悪い思いが渦巻いている。

その笑いの中にいた堂上の親友、小牧が何やらフォローらしきものを入れる。

いや、フォローではない。

おいしいネタの提供だ。

「堂上は王子様としてじゃなく、今の自分を好きになつて貰いたかつたんですよ」

「自分を見ろつてか！」

「…まあ確かに。笠原の王子様像は凄まじいものがあつたしな」

「そうそう、あんなに王子様スキスキと言われ続けたら、堂上も

自分が王子様ですって言えんわな」

「にしちゃあ、入隊初期から特別扱いしまくりだつたけどな」

「・・・天然記念物のような恋愛を身近で見れてたのは貴重だつた
1人の隊員がしみじみと言うものだから何人かの隊員も感慨深く遠
くを見る。

「あんな恋の仕方、今の中学生でもせんだらうに」

「やつとだな」

「ああ、やつとだ」

だから 玄田がパンツツとデスクを叩く。

「これは、退院祝いも兼ねて、何かせにやあいかんだり」

「何かつて？」

「そうだな、分かりやすく横断幕でも作るか？」

隊長の言葉にニヤニヤ顔の隊員たちに笑いの拍車をかけた。
就業後の事務所に不穏な空気が渦巻く。

何を書くのか、どうすれば堂上から面白い反応をもらえるのか
と各自が色々と意見を出す。

その様を遠巻きに見ていた小牧が、隊長たちの嫌がらせ、墓、快気
祝いを目の前にしてクククと笑いを漏らさずにはいれない。
本当にあの人たちは堂上の復帰が嬉しくてたまらないのだ。
だが、上官たちの行動の真の意図に気づかぬ手塚は、玩具と化した
まだ帰らぬ上官を気遣い小牧へと問い合わせた。

「あの…止めなくて良いのでしょうか？」

「無理だよ、手塚。あの隊長を止められる人間なんていないって」

小牧のその言葉に、グツと言葉が喉に詰まる。

確かに、堂上がいないこの場で、あの隊長を止めようと思つ輩は存
在しない。

唯一、この場にいたら止めるであらう上官がその対象なのだから、
尚更だ。

手塚は、沈痛な面持ちで止めるのを諦めた。

その代わり、
ずっと疑問に思っていた事を隣で楽しそうにしている上戸へ問い合わせ
ける事にした。

「あの小牧二正」

「ん？」

「前々から気になっていたのですが、堂上二正が『王子様』って何
なんですか？」

手塚は、確かに前に笠原が卒業とか言っていたし、隊長たちも事ある
ごとに言つてましたよね？と小首を傾げてみせた。

その疑問を耳に聞き入れた小牧は、ブハッと上戸の世界へと旅立つ
てしまつた。

身体を丸の字に曲げて、ここにも天然記念物がいた、と笑いの端々
に搾り出したように言つ。

上戸の渦にいる小牧に小首を傾げる手塚が王子様の説明を受けるま
で後 20分強。

終

阻止せよ 番外（前書き）

堂上 × 郁 茨城戦後 革命前

『阻止せよ』の続きです。本編よりもちやくちや長いです。

「笠原あんた、呑んでないじゃなーい」

大学時代の友人が結婚した。

予定していた日取りより、新婦の都合で早まつた式だつた。

ぶつちやけた話、新婦の妊娠が発覚したのである。

恋愛経験皆無の郁は結婚の報告だけでも驚く事柄だったのだが、妊娠と聞いた時は瞳^めが飛び出すかと思うぐらい剥いた。

予定していた挙式と出産予定日がかち合つてしまつたらしく、それなら安定期に入つてすぐにと突如早められた式は都合が付かず出席する事は叶わなかつたが、披露宴一次会には終業後に駆け付けられた。

柴崎「一デイナー」のカジュアルドレスは自分的には可愛過ぎて似合わないと思っていたのだが、久々に会つた友人たちから絶賛されまくるという現象に立ち会う事になり、これにはちょっと驚いた。こじんまりとした洒落た感じのレストランを貸切にした一次会会場は、立食式となつていて各々が楽しむ形だ。

主役のはずの新婦と新郎は、二次会開始時から接待係へと化している。

先ほど、郁のところにも乾杯用のシャンパンを注ぎに来たところだ。

「あー…あたし、これ以上は呑めないんだ」

「なんで？あ！あんた酒弱かつたもんねー」

けど、チュウハイ3杯まではいけた事ない？と郁の過去を知る友は聞いてくる。

確かに、チュウハイにしたら3杯、カクテルで2杯、ワインで1杯までは寝オチせずに入れられる量なのだが、今回はどうしても呑めない理由があった。

「勤務先の上司に1杯しかお酒を呑むなつて言わされて」

「ハア？ 何それ！ プライベートにまで口出しちゃくんの、 あなたの上司

「今まで、 散々寝オチして迷惑かけまくりだから心配されてるだけ！」

「それにしても祝いの席でお酒一杯つて… どんな頑固オヤジの言い草よ」

ありえないと言われ、 郁は内心怒りを覚えた。

堂上の事を一切知らない立場からの発言なのだから、 彼女の言葉など酒の席の戯言としてサラリと流してしまえば良い。 だけど、 堂上が悪く言わるのは我慢がきかない。

追いかけても届かない小柄なくせに大きな背中も、 迷つてしまわないうに導いてくれる力強い言葉も、 彼からもたらされる暖かい手の温もりも。

それは、 彼と関わる事で知る事柄だと分かっている。 ちゃんと分かっている。

彼女に悪気はない事も。

ああ、 あたし、 こんなにもあの人の事が好きなんだ…

上官として尊敬しているし、 これからも変わることはない。 だけど、 今、 この胸に宿る怒りの正体は、 私の好きな人を酷く言わないで！ という類だ。

「オヤジじゃない！ そりゃ私より5つも年上だけど、 カツコイインだから！」

「わ！ なによ、 どうしたの突然」

「凄く凄く尊敬できる人なの… だから、 悪く言わないで」

怒りから段々と悲しい気持ちが増していき語尾が小さくなっていく。

「笠原、 あんたさ…」

「小牧教官、あの人、笠原から連絡があるまで、ああも仁王立ちで待ち続ける気ですかね？」

郁が出掛けを行つてから、かれこれ1時間半経つが、堂上は玄関前で仁王立ちしている。

風呂組や外食組が帰つてきたりする度に、物凄い仏頂面の堂上の姿に慄いてしまつてゐる。

そりや、鬼と謳われる堂上が仁王直しく立つてゐるのだ、ビビらな方がおかしいだろ？

「こんなに焦るなら早く手に入れちゃえは良いのに」

「あれだけ遠回りした手前、どう動けば良いのか手探り状態なんじやないかな？」

「それでも、傍迷惑ですよね、あれ」

共用スペースに腰掛けで3本目ビールを傾けながら小牧は不機嫌な背中を見る。

柴崎も同じようにビールを飲む。もちろん、小牧の奢りだ。

「けど、あんな格好させて、あんな事を言われりや堂上じやなくても焦る気持ちは分かるな」

結婚式の二次会は合コンと同じ、郁が出てしまつてから柴崎が言った発言を思い浮かべて苦笑する。

「あら、小牧教官も焦ります？」

「そりやね。自分がいない所で好きな子がキレイな格好を他の男が見てるつていうのは焦るかな」

「自分に気持ちが向いてると知つてても？」

「それでもだよ・・・しかも、堂上の場合、笠原さんの気持ちを知らないから余計だよね」

傍から見れば、お互いの気持ちはバレバレなのに、当人同士は何故気付かないのだろう。

とても歯痒い2人である。

「ホント、大変な2人ですね」

発泡感が喉を駆け巡った時、柴崎の携帯がブブブブブブとポケットの中へ震えた。

仕事が終つてからもモード変更し忘れたままだつたようだ。
長い震えに、それが電話着信だと分かり、いそいそと取り出すと画面には『笠原郁』という文字が浮かんでいた。

「笠原？」

帰るんだつたら、二つちの電話じゃないでしょーに、と不思議がりながら通話ボタンを押す。

小牧に、笠原さん？と尋ねられ、首だけで返事を返し、電話へ対応した。

どうしたの？はあ、今どこよへ化粧室…逃げてきたあ？
柴崎から漏れる言葉だけでは把握が出来ない。

教官に？あんた、上官命令が下つてんだしょ？連絡しなか

つたら怖い事になるわよ。

どうやら、帰る予定のようだ。だが、堂上からもたらされた理不尽な命令を渋つているらし。

もし、連絡も寄越さず帰還などしてしまえば、仁王立ち堂上との対面は必須。

こつ酷く叱られるのが見えている。

それに、郁の今の状況も気になつた。

ちよつと待つてなさい、そう言つと玄関前の堂上を呼んだ。

「堂上きよーかーん、笠原から電話ですよー」

耳から離れている上体なのに受話器の向こうから「ジー...」といふ声が聞こえてきた。

「君たち、新婦側の友達？」

会話が見知らぬ声に遮られた。

後ろを振り向くと3人連れの男が立つていた、新郎側の友人なのだ

ろう知らない顔だ。

「そうですよー」

友達が社交辞令でにこやかに答える。

それに気を良くした男達は郁たちを取り囲むようにかわりがわりと話しかけてきた。

「君は姿勢がキレイだね、モデルさん？」

長身を気にする女性がいる事を織り込んだナンパ慣れしている口調である。

自分より10センチ以上高い男から、顔を覗き込まれる様に話しかけられて郁は少し引く。

仕事柄、女性扱いをされ慣れない郁としては、こういった対応にどう対処すれば良いのかが分からぬ。

どこか悲しい気分を残したまま、突然沸いてきた慣れない状況にあたふたする。

「い、いえ、モデルなんて滅相もないツツ」

「とてもキレイだからモデルかと思った…あれ、グラスがカラだね。なに呑む？ワインは好き？さつき呑んだんだけど、ここでのワイン美味しかつたよ」

シャンパンを飲んだ郁は既にワインはレッドラインだ。

呑んでしまえば半寝オチになつてもおかしくない。

「お酒弱いので、もう」

「そうですよー、この子つたら物凄く弱いんです。代わりに私がオススメ頂いちゃいますねー」

男慣れしていない郁を知つてゐる友達が絶妙のフォローを入れる。相手に気分を害させない様に媚を含んでみせる。

そうする事で困り顔の郁から自分へと興味を移させようとしたのだが、この男はターゲットを郁に定めているらしくスマート加減をアピールしつつ話題を変えて食い下がってきた。

「仕事はなにをしてるの？今度、食事にでも行こうよ。俺はね、法務省務めだよ」

「法務省、すつ「」ーー！」

明らかに自分はエリートです、といつ事を含んだ物言いだと分かるが驚いてみせる。

この男が、新郎にとつてどの位置の人間か分からない「つば下手に出来る事は出来ないのを分かつた友達の対応に心の中で郁は喝采を送る。

自分には出来ない腹芸だ。

図書隊勤めの郁にしてみたら法務省勤めに何の魅力もない。むしろ、良化特務機関のせいで嫌いに近いのではないか。

郁は図書隊関係者、特殊部隊として軽々しく職業は明かせないのもある。

それに、プライベートの場とはいえ、この男は総務省勤めでもあるし、もし良化特務機関に関わりがあるとなつたら最悪の状況になる事は想像に無い。

言わぬ事に越した事はない。

郁は、一步後ろに下がると、自分に出来る愛想を繰り出した。

「「めんなさい、ちょっと化粧室に行きたいので失礼しますねー」」何度もお辞儀をしながら、クルリと後ろを向き、友達の腕を引っ張つてその場をそそくさと移動した。

「はあー、ビックリしたー」

化粧室の洗面前に両手を付いて頑垂れる。

その横では、口紅を塗り直す友達がいる。その顔はニヤニヤしていた。

「女の子扱いされないと怒るくせに、それたらされたで困る所は変わつてないね」

「どうして良いのかわかんないんだもん「普通にしてたら良いじゃない」

「普通つてー普通にしてたら引かれるよ」

全然、可愛くないし女の子らしくないもん、と文句を言つがそう思

つてているのは郁だけで十分に郁は女の子である。

「あの人、多分今出て行つたらまた絡んでくると思つよ」

「え！？」

なんで！？といふ郁に溜息が出る。

あれは郁がターゲットのナンパなのだと、どうして気付かない。

「あんた、図書隊じやない、あの人法務省だし、どうすんの？」

「あー、あめでとうって言えたし、帰ろうかなー」

「そつする？タクシー チケットは受付の人に行つたら貰えるみたいよ」

「うん・・・あー電話ー」

迎えに行くから帰る時、連絡寄越せ・・・・上官命令だ！

行きのタクシーの中で言われた堂上の言葉を思い出した。

堂上はああ言つたが、好きな人の言葉としたら嬉しいのだが、プライベートの時間に上官に迷惑をかけれないといつ想いが選考してしまつ。

けど、命令と言われれば郁は逆らえない。

どうしようかと悩んでいたら友達が電話するの？と切り出してきた。

「うん」

「じゃ、席を外した方が良いね。私は会場に戻るから……あの男じゃないけど、時間が合えば食事にでも行こつ」

「うん。ありがと」

1人になつた郁は携帯と睨めっこを始めた。

どうする？

堂上に電話をかけるか、このまま連絡せずに帰るか・・・悩む。

どうするべきか悩んだ結果、郁は良き相談相手の番号を呼び出した。ここは、柴崎に聞いてみて決めよう。ちょっと現実放棄、困つた時の柴崎相談だ。

プルルルルという呼び出し音が響く。

「あ、柴崎？・・・えっと、化粧室。男の人に話かけられたんだけど、その人法務省勤めでね、私、図書隊だし迂闊な事言えないじゃない。どうして良いか分からなかつたから逃げ込んだの・・・帰ろうと思つんだけ、教官に連絡した方が良いのかな？・・・うん、上官命令・・・」

電話越しに呆れた声を聞きつつ待つ体制に入った瞬間、受話器の向こうから柴崎の声が遠くに聞こえた。

『堂上わよーかーん、笠原から電話ですーー』

その言葉にヒツ！という声が漏れた。

あんた今、どこにいんのーー！という言葉は無視される。

次に聞こえてきた言葉は、地を這つよつよつと堂上の声だった

新郎新婦に帰りの挨拶を終えた郁は、見通しの良いバス停のベンチに座っていた。

田中は春日よりになつて來たが流石に夜になると冷える。

郁は着て來ていたスプリングコートの前を合わせ身体を小さくして保温に勤めた。

そして、先程、化粧室での電話のやりとりを思い浮かべていた

『お前は上官命令も素直に聞けんのか

「ど、堂上教官！』

堂上の不機嫌な声色に身体が勝手に真っ直ぐになる。
敬礼までてしまいそうな勢いだ。

『で、帰るのか？』

「あ、はいー。そのつもりですがツツ」

『場所は?』

「は?」

『会場の場所はどこだと聞いてるんだ!』

『一駅向こうの華月つていう創作料理のレストランです!』

『今から行く』

『やー、タクシーでしたら1~5分で帰れますし』

「黙れ、上官命令だと言つただろう。今から行くから大人しく待つてろ」

法務省の面子と出くわしたくなかったものだから、早々に会場を抜け出でていた。

堂上との電話から、まだ5分も経っていない。繁華街に近い場所で人通りも多く、まだ10時前という事もあって女性の一人歩きも目立っていた。

正直、堂上が迎えに来てくれるのは嬉しい。

だけど、戦闘職種としても部下としても、プライベートの時間帯にまで心配されるのは悔しいって気持ちもあった。

そんなに信用ないですか、私は

それとも少しは私の事を女の子として見てくれてるんですか

後者だつたら良いな・・・郁はヒールの低いブーツの先を見詰めながら思つ。

「あー、笠原みーつけ!」

名を呼ばれるのと同時に頬に暖かい物を感じてビクリと身体が震える。

振り向けば、会場で話していた友達がココアのホット缶を2本持つて立っていた。

「あれ、なにしてんの？」

「さっきの男がしつこく話しかけてくるから私も逃げてきちゃった」
はい、とホットココアを郁に渡しながら、その隣に腰掛けた。

「もう帰ったかと思ったのに、何でいるの？」

笠原見付けてビックリしたよ、思わず、その自動販売機で無意識に2本のホットココア買っちゃったわよ、とカツとプルタブを開けながら問うてきた。

「やー…上司がね、迎えに行くからって待つてるって」

普通に考えてもおかしな発言だろ、と思いつつも正直に答える。プライベートでも心配される部下って…

「わー優しい上司さんねー」

「うん、優しいよ。こつちはこつまで経つても心配かけっぱなしで恥ずかしいのこの上ないけどねー」

「それは違うんじゃない？」

「え」

「いたいたー！2人共、急にいなくなるんだもんな。今から帰るの、送つて行こうか？」

またもや2人の会話に遮られる。

さつきの今だ、流石の郁でも忘れるはずがない。

法務省勤めの面々だ。

自分でもたいそう嫌そうな顔をしているだろうと思つが、隣の友達は明らかに嫌悪が見えている。

自分がいなくなつてから散々嫌な気分を味わつたのだろ。

「迎えを待つてますので」

こういう空氣を読まない図書館利用者を多々相手にしている郁は、堂上直伝の対処法を最大に發揮して相手との距離を取つた断りを入れる。

相手が不快に思わないように、声を勤めて柔らかくした。

「怖いのかな？大丈夫だよ、送つてあげるだけだからさ」

効果なし。

1人は郁の隣に、もう2人は友人の隣へと座る。肩を組まれそうになり郁は慌てて立ち上がった。

「困ります。本当にもう直ぐ迎えにくるので」

「本当に？」

しつこい・・・内心苛立ちが沸き起る。

いつも堂上たち班メンバーや悪ふざけは凄いが大人な特殊部隊の面々と接してきているだけに、郁の苛立ちはどんどん増してしまう。日頃、彼らがどれだけ郁を尊重してくれているのか身に染みる時間だ。

我慢我慢と心の中で念仏の様に唱えていたが、嫌がる友人の肩に腕を回した瞬間に、その我慢の糸がブツツンと音とを立てて切れた。わなわなと震える拳を解き放つと、友人の横にいた男の胸倉を掴んでいた。

「嫌がつてんの、見ててわかんないの！」

突然女に胸倉を掴まれボーゼンとしていた男のシャツにグッと力を込めた後にそれを解放する。

郁に下心見せていた男は、法務省というブランドになびかない上に拒絶までしてきた郁に対し態度を180度変えて敵愾心を剥き出してきた。

肩に掴み掛かるうとしているのを横目で捕らえていた郁は対処しようとした瞬間に、後方から伸びてきた腕によつて阻まれた。

なんだ！と驚いたが、稻峰司令の誘拐事件の時のようにそれが堂上だと直ぐにわかつた。

振り返ると、やはり堂上で、その顔はかなりの不機嫌具合を物語つていて怖い。

「お前は大人しく待つ事も出来んのか」

男の手首を痛いまでに固めたまま郁を睨む。

先程まで沸いていた怒りは、どこかへ吹つ飛んでしまった、それく

らい怖い。

「う・・・

「怪我は？」

「ありません」

「ありません」

堂上は郁の後ろに隠れる状態の女性に瞳を向けて同じ事を聞く。ヒーローのような現れ方をした堂上に一瞬心を奪われていた友人は慌てて、大丈夫です！と答えた。

それを確認すると掴んでいた男から手を離し彼女達を隠すように前に立つ。

「で、これはなんだ？」

地を這うような声で男達を問う。

明らかに自分達とは違う身体つきに怯んでいる様子ありありの引け腰だ。

「答える気はないみたいだな…さっさと消えろ

時間の無駄だと判断した堂上は男達を解放した。

そして、視界から男達が消えてしまふまで視線を外さずに待つた。完全に消えたのを確認して、縮こまっている郁へ振り返った。

「お前はバカか！」

「う・・・

「わ！違うんです、笠原は悪くありません

物凄い怒号に友人が割って入った。

「あいつ等、多分私を付けて来たんだと思います…笠原は助けてくれただけで怒られるような事はしていません」

だから、叱らないで上げて下さい、と言わてしまえば叱れるはずもなく。

堂上は深い溜息を吐いた。

「わかった。この件に関してはここまでだ。門限も近いし帰るぞ」

「はい。あー待つて下さい、友達を先にタクシーに乗せないと」

「わかつている。俺が乗ってきたの待たせているから、それに乗つてもらえ」

「はい・・・ありがとうございます」

タクシーを待たせている場所に3人で移動した。

そして、友人を乗せて、今度こそ別れの挨拶をしようと窓に近付くと友人が身体を乗り出して郁に耳打ちした。

言葉を聞いた瞬間にボツと瞬時に赤面した。

それを見て爆笑しているとタクシーがゆっくりと動き始めた。

まだ爆笑したままだつたが郁に手を振り、それが別れの挨拶になる。郁は遠ざかるタクシーを赤面したまま見詰めるしかなかつた。

「なんだ？」

何かを耳打ちされたのは見ていた分かったのだが、その内容を聞いていない堂上は不思議そうに小首を傾げる。

だが、言われた郁としては、堂上に告げられるはずもない内容だつたわけだ・・・

「普普通ライバシーですッ！」

そう言つと、タクシー捕まえて来ます！と逃げ出した。

『あの上司さんの事が好きなんでしょう？あんた達お似合いだよ』

少し離れた場所で必死にタクシーを拾おうとしている郁の背中を見詰めながら堂上はわけの分からぬ彼女を想つて苦笑した。

終

じょっヒタな堂上さん 提案編（前書き）

小ネタシリーズ 色々と駄目な堂上さん

革命前

蝉の鳴き声がムカつくとある田の」と。

休憩時間に入っていた堂上班は、特殊部隊事務所にて名々が好きなように過ごしている。

今日は室内業務なのだが、ずっと歩きっぱなしの警備をしていたためにジワジワとした暑さに襲われ続けていた。

ジワジワと感じる暑さよりも、いつそ訓練で汗を流していた方が随分と爽やかな気がすると思つてしまふのは防衛部所以だろうか？ 郁もコップいっぱいの麦茶を一気に飲み干した後、ぐてえと机に張り付いていた。

ちょっと冷たくて気持ち良い。

あー…来週から奥多摩だなあ…あっちの方が山だし涼しいかなあ？

訓練が辛くないといつたら嘘になるが、身体を思いつきり動かした後は物凄い開放的な気分になるので好きだ。

ただ、周りには山しかなく図書基地より夏を体感してしまふ恐れがあるのだが。

せめて、少しは涼しい思いがしたい、と願わずにはいれないと郁は来週の奥多摩野外訓練の過ごし方について思いを寄せた。

「あーつーいー」

郁は氷だけが残ったコップを見詰めながら頑垂れる。

そのだらしない感じに隣にいた手塚が眉を寄せて非難した。

「気分がだらけているから暑いんだ、しゃんとしろよ、お前」

「うつさい！あんただつて暑いんじやん！休憩入つて直ぐにシャツのボタン外してたくせに、私だつて外したいーー！」

郁が言うように手塚のシャツはネクタイが外されボタンも上から3つも外されている。

同じようにボタンを外そつとして堂上に叱られた経験が以前にあり、郁のシャツは上までしつかりと閉められている。

こんな事なら半袖上着で隠れるのだからタンクトップ型のインナーにしどけば良かつたと後悔する。

「絶対に去年より暑いってー」

「それ去年も聞いたぞ」

「うそおー」

郁は上げていた顔をパタリと机に戻したと同時にバッターンと景気の良い音を鳴らしてドアから入ってきた人物がいた。

玄田隊長だ。

大股で歩いてくる威圧感に暑さが倍増させられそうだったが、いつもとは違う玄田に郁はあれ?と思つた。

玄田の短い髪もその厳つい顔も戦闘服の上半身が濡れていたのだ。

「わー隊長どうしたんですか!」

郁は立ち上がって机にしまつてたハンドタオルの予備を玄田に手渡した。

すまんな、と郁からハンドタオルを受け取ると大雑把に拭くが、あまり役には立つていないうだ。

「何をやらかしたんですか」

それまで黙つていた堂上が物凄いしかめつ面で玄田に言い寄つた。

「んあ?」

「どこかの水道管でも壊したんですか?」

「え? 大事故じゃないですか!」

「それとも、それは隊長の異常な発刊作用が原因ですか?」

ちやつちやつと吐いて下さい、と詰め寄るが、堂上の吼える様など

日常の1コマと化している玄田はどこ行く風だ。

ふん!と腕を組んで胸を張つた。

「これは水浴びしただけだ！」

「はあ？ なにしてんですか、あんたは…」

「えー隊長、水浴びですか、良いなあー」

「ああ、気持ち良かつたぞ」

「羨ましー」

「アホかーどこが羨ましいんだ、中途半端の水浴びなんてな涼しいのは一瞬なんだぞ」

「それでも、その間は涼しいんですね」

「お前は分かつてない。後5分でもしてみる、今度は逆に暑く感じ出すはずだ」

「えー！」

「風呂から出る時に水浴びして出てみる、分かるから」

「はあ…でも、水浴び良いなあ」

「まだ言つか！」

ん 水浴びかあ。

郁はふと、ある事を思い付いてしまった。

言つたら確実に堂上に怒られる事は必須だが、思い付いてしまったからには言いたくなるのが郁だ。

ノリの良い隊長以下特殊部隊隊員たちだ、もし美味くいく可能性が少しでもあるのなら試してみたい。

「隊長ー！」

郁はサッと拳手する。

「奥多摩には川とか流れてないんですか？」

「お前まさか・・・！」

堂上がすぐさま察して止めようとするが、郁はすかさず言葉を紡いだ。

「来週からの奥多摩訓練の合間で良いから水遊びがしたいですー。」

郁の言葉に堂上はやがぱつ・・・と肩を落とした。

提案編終

じょりヒタな堂上さん マッソ編（前書き）

小ネタシリーズ 提案編の続きです。

革命前

「それ良いな！」

郁の話を聞いていた来週から一緒に奥多摩訓練へ行く特殊部隊の面々が嬉々として輪に入ってくる。

玄田も参加予定であるために、郁の案は即許可された。

幸いにも奥多摩のキャンプコースを少し離れた場所に流れの緩やかな川がある。

その前後に雨が降つていなければ安全だと断言できるくらい浅く最適な川だ。

わーい、水遊びーと喜ぶ郁の頭に拳骨を落としながら堂上が盛り上がり始めた空気を切つた。

「水遊びなど断固としてやめさせん！」

「訓練ですよ！我ら図書隊には必要ないでしょーがつ！」

隊長の真正面に陣取り言葉を叩きつけた。

小牧お得意の正論を振りかざしてはみたが、逆に白い目で見られた。その場にいる特殊部隊メンバーが相手だと、何故かこちら側が悪い事をした気になるのはどうしてなのだろう。

「教官あたま硬ーい」

郁からもブーリングが飛び堂上は怒りが噴き上がる。

俺がなぜ断固反対しているのか分かつてなさ過ぎだ！

堂上が反対するには理由があった。

郁も一応妙齢の女。

しかも、特殊部隊唯一の女子…まわりにいるのは男だけの環境で水に入るという事は水着を着なければならないという事だ。男所帯でそれはないだろう、と堂上は頭が痛くなる。

だが、堂上一人ではこの場を阻止する事は出来ない。

チラリと小牧と手塚を見るが、手塚は何故か瞳^めが合わないし、小牧は盛大に笑いの国へ旅立つていて希望が薄い。

しかも、当の本人は、もう決定事項なんですよ！、と満面の笑みを浮かべている。

決定事項…この阿呆が…俺は知らんぞ…知らんが、これだけは阻止だ！

堂上は再び肩をガクリと落としながら深い息を吐いた。

「もう勝手に水で遊ぶなりしろ…だが！お前、その時はTシャツに短パンにしろよ」

「はへ？」

なんで？と首を傾げる。

だが、他のメンバーは堂上の意図を的確に読み取り、口元に笑みを浮かべたり、ブフ！と吹く者が続出だ。

それらをキッと睨み付け牽制を図るが、背後から肩を組まれ一タ一タ笑いをされる。

「なーる程。お前は笠原の水着姿を俺達に見せたくないわけだな」「え」

その言葉に郁の頬が微かに赤くなつた。

「違ツ！…・・・・・一応こいつも妙齡の女ですからね、阿呆にも恥じら^レうてものが必要でしょうに」

堂上は否定の言葉を吐こうとしたが、それでは自分が変に郁の水着を意識しているような気がして、あえて呆れたふうを装つた。

誤魔化されるのは郁（と手塚）だけで、他のメンバーは一タリ顔が増すだけだ。

「何気に失礼じゃないですかーーー！」

「黙れ、阿呆娘」

「ウキ

！！！！

苦し紛れの堂上に郁が噛み付くものだから小牧の上戸^{ヒト}が増す。
涙を拭きながら、言葉を紡ぐ為に何とか笑いを堪えようとするが、
どうにも止まらない。

小牧は笑いで震える声で爆弾を投下した。

「T…シャ…ツとた…短パ…ン…ククク…のほつ
が…・・やば…やばく…・・ない?…・・ブツツ…ヤベ…笑いが
止まんねえ!」

小牧爆弾がドーンと堂上に衝撃を与えた。

堂上の肩を組んでいた同僚が郁には聞こえないよう堂上に耳打つ。
もちろん、笑い声だ。

確かに、水に濡れたTシャツはペッタリ肌に張り付くぞ。水着よ
りもろに体系が露わになる…それよか、いつそ清々しいまでに水着
を着られたほうがマシってもんだな

「な!」

「なんだ、王子様はそれがお好みか?」

耳元でガハハハと笑い声を上げる同僚の横で堂上は耳まで真っ赤に
染めていた。

郁は今ショッピングに来ていた。

奥多摩川遊び企画（？）の水着を買つたのだ。

そして、例の如くいつの間にか川遊び云々事情を熟知していた柴崎も一緒である。

「笠原、これなんてどう？..」

柴崎は真っ白ビキニを郁に宛がう。

かなり布面積が薄いがモデル体型の郁に似合いそうだ。

「訓練の合間の水遊びで誰がこんな水着を着るつてーの！」

郁は柴崎から水着を引つたくるやいなや水着を元あつた場所に戻し、顔を真っ赤にして柴崎を怒鳴り付けた。

わざとなチョイスなのだろう、柴崎はニヤニヤ顔だ。

「もつと露出の少ないヤツが良いのー..」

「Tシャツに短パンみたいな？」

「そりそりー堂上教官に言われた時は、何それー！って思つたんだけど、よくよく考えたら良い案な気がしたのになー。何でか、いきなり駄目だつて」

なんでだろ？と郁は水着を物色しながら言つ。

あの辻闇王子様はあんたの体のラインを誰にも見せたくないのよ、と口には出さずに思つ。

べつたりと肌に張り付いたTシャツ姿の郁を想像したであらう上官が、その時どんな様子だったのか想像すると楽し過ぎる。リアルタイムで見たかった！という思いでいっぱいだ。

ずっと思案顔だつた郁が難しい顔のまま言い放つた言葉に柴崎は驚いた。

「いっそ、ワンピースに」

なんて馬鹿な子なのかしら…

いつもなら可愛い郁の外れた思考に微笑を感じる柴崎だが、今は笑えない。

「それだけはやめなさい」

露出の少ないを考慮した結果出した名案がワンピースだった郁は、ピシャリと否定されて不満の顔をした。

「なんでよ」

「良いのよー、ビキニよつある意味いやらしさ倍増のワンピースが着たきや着ても。まあ、訓練の合間に遊ぶ水遊び」ときで恥ずかしい思いをして後悔したきや止めたいわよ」

ここにきて初めて水遊び云々を猛虎反対した堂上に同情の念を抱いた柴崎だ。

柴崎のいつ事は尤もといつもので、郁は男女が大勢たある解放的な海ならともかく山の中の川でビキニだのワンピース型の水着を着ることが滑稽である事に気付く。

「ああもうーじゃどうじゅうてんのよー」

頭を抱えて唸り出した。

「だから、私が付き合つてやつてんでしょーが

「けど、ここにある水着つてビキニとかばつかだよ」

「まあまあ、麻子様に任せなさいって」

その頃、堂上はといふと公休だといつのに、小牧と朝から隊長丸投げの書類を片付けていた。

始業時間から黙々とこなしていた仕事は、なんとか午前中に片付き

そうだ。

「どーじょー」

書類に顔を向けたまま小牧は堂上に声を掛ける。

「なんだ？」

「知つてた？ 今田さ、笠原さん、柴崎さんと奥多摩水着を買いに行つてゐらしよ」

「・・・・・・・・・・」

「アレ？ なに気にならないわけ？」

「ならんな」

堂上は書類をパラパラと捲りながら即答した。

小牧は書類から顔を上げて持つていたボールペンを指でクルリと回す。

「へえ、ならないんだ・・・俺は気にならぬよ」

堂上が小牧の言葉にピクリと眉を動かし顔を上げた。

その反応に機嫌を良くした小牧は、二口りと笑みを浮かべ自身の意見を述べだした。

「笠原さんはモ_デル体系でスタイル良いし、なによつて凄いのはあの脚だろ？ お前の事、王子様つて知つてる特殊部隊の奴らでも、口口ツと落ちる輩が現れてもおかしくないだろ？」

「は？」

「だつてほら、笠原さん、十分に魅力的な女性じやない」

堂上は、何言つてんだ、こいつ？ といった顔で小牧を凝視するしかない。

「そうなつたら、もう迂闊に笠原さんの頭にポンポン出来なくなるね」

「・・・・・・・・・・・・

「だつてそつでしょ。彼氏がいる女性をむやみに触れないじゃない」

小牧はデスクの上の書類を1つにまとめてコンコンと揃えた。

そして、立ち上がるなり、それを堂上のデスクに置いた。

「はい、出来たよ。じゃ 午後から毬江ちゃんとデートだから先に上

がるよ
「

そつと固まつたままの堂上の肩をポンポンと叩いて事務所を後にした。

残された堂上は持っていたボールペンがポトリと指から落ちたが、それに気付かず未だボーゼントしたままだ。

お買物編終

ウサギ泥棒を探せ！（前書き）

別冊？ 堂上とお付を合ひ中
お泊りテート頃。

オリジナルキャラあり。

途中で話が止まっています・・・

ウサギ泥棒を探せ！

それは、大きな音と共にやつてきた

バタンツツ、と事務室のドアが力任せに開けられ、丁度休憩に入っていた堂上班の面々は驚いて一斉に視線を向いた。

「笠原いますか！！！」

勢いと共に入つて来たのは2年先輩にあたる防衛部の女子隊員だ。その形相は鬼気迫るものがある。

突然名を呼ばれた郁は反射的に立ち上がつた。

「笠原います！」

その声に入り口付近にいた先輩防衛員は、ガツと顔を向けた。

何も悪い事はしていないはずなのに、ひい、と悲鳴をあげてしまつのは何故だろう。

怖くてちよつと引け腰になる。

先輩防衛員は、ブーツをカツカツカツと地面に叩きつけるようにして郁の方へ歩いてくる。

そして、郁の目の前に来るや否や自身より10センチ高い郁の肩を組んで、部屋の隅へと連れて移動した。

「な、なんですか！なんなんですか！」

バタバタ暴れるが、先輩の顔が怖過ぎて本気も出せない。

助けを求めて手塚を見るが、ガンとして視線を合わせてくれない。堂上は、未だ固まつたままだ。助けは無理そうだ。

小牧は・・・手を振つている。

郁は引き摺られたまま連れて行かれた。

先輩は、部屋の隅に来ると腕で郁を逃げられないように挟み込み、瞳だけで男性陣へ向ける。

「男性の方々は近付かないでお願いします」

そう言うと先輩は胸ポケットから数枚の写真を取り出した。

それを郁の胸へ押し付ける。

「なんですか、これ？」

怪訝な表情で、それを見ると郁の顔が一気に驚愕に変わった。
写真を自分の胸に仕舞う。コンマ一秒の早業だ。

「なんなんですかツツ、これ ツツー！」

絶叫した。

「と、いう事は、これの存在を笠原は知らないわけね」「知りませんよ、こんな物ツツ」

顔をブンブン振つて否定する。その顔は茹^{ゆでだい}蜩^みみたいに赤い。
先輩は、そうよね…と呟くと、今度は堂上^{男子}上班^{男子}メンバーに顔を向
けると「事件です」と短く的確に告げる。

郁の反応とその真剣な物言いに、それが冗談ではない事を直ぐに理
解すると真剣な表情に切り替わった。

堂上は、立ち上ると近付く事はせず、

「なにがあつた」

と、返答を求めた。

「それについては私から」

少々、不機嫌そうな声がドア近くで発せられた。

柴崎麻子である。

ドアの外へ何かしら合図を送ると柴崎は数人の人間と共に入ってき
た。

特殊部隊事務室へ毎日のように日参している柴崎だが、他人と一緒に
に訪れるのは珍しい。

しかも、それが女性で年齢層のバラバラの防衛と業務部だと尚更だ。
その数人の隊員に挟まるのような形で業務部の制服を着た男性隊員
もいるが、連行される囚人のように頃垂れていた。

堂上班は険しい表情の柴崎に警戒心を強くした。

彼女がこんな風にトゲを出しているのはただ事ではないからだと知つてゐる。

「なにがあつた」

堂上がもう一度問う。

「簡単に言つてしまつと『盗撮』です」

その言葉に汚物を見付けた様な顔をした。

そして、郁の持つ物が、その盗撮に関係するものと推測されて眉間の皺が深くなる。

「盗撮と言つても、下着云々じゃないんです」

だから、余計に始末が悪い。

柴崎は苦虫を噛んだ様に顔を歪め、郁のもとへ歩いていくと郁から写真を取り上げた。

男性陣には見せない様に裏返した状態で堂上たちへ写真を主張する。郁は、オロオロとするばかりだ。

「け、けど、柴崎、これって！？」

「普通に見せられるけど、無防備にも程があるつて写真が主なんです……悔しいわ。こんな可愛いいシヨットを私の断りになしに販売するなんて」

「ちょっと待て！なんで、あたしの写真なのにあなたの許可がいるわけ！」

「あら、これに関しては主張するわよ、私は」「するな！」

「まあ、確かに、笠原は可愛かった」

先程まで、鬼気迫る顔をしていた先輩隊員も納得の相槌を打つ。一緒にいた他の女性隊員たちも、うんうんと頷いていた。

「み、見たんですか！他のみんなもお？」

「見た。見たからこそ発覚したんでしょ、これ」「で、発覚したキッカケはこいつです」

柴崎が女性隊員たちに囲まれている男性隊員を一瞥する。

それに合わせて全員の視線が移動し、男性隊員が伏していた顔を更

に伏して視線から逃げようとするが、視線は突き刺さるばかりだ。

男性隊員の隣にいた女性隊員の一人が、手を上げて意見を述べる。

「私が、伊藤一士… こいつの名前、伊藤と言つんですが、私の不注意で伊藤一士とぶつかってしまった時にですね、こいつが笠原士長の写真を落としたんですよ」

「で、彼女が伊藤一士に問い合わせているときに柴崎と私たち防衛部員が遭遇しました…」

今に至るわけです、と締めくくった。

羞恥と怒氣を含んだ顔の郁が、ガシツツと伊藤の襟首を掴んだ。

「ちょっと、あんた、あのしゃ、しゃ、写真をどうしたつてーの…！」

「！」

吐け！吐かないと落とす！と首を締め上げている。郁の意思に關係なく落ちそうな勢いだ。

「か、笠原士長、ぐる…じいです…」

「これじゃあ話す前に死ぬわよ、あんた。落ち着きなさい」

柴崎の言葉に渋々といった感で手を放した。

そして、伊藤の前に回り込み、魅惑的な笑顔を一瞬だけ向けると表情を消した言い放つた。

「さ、私たちにした話をもう一度話しなさい」

美人の無表情ほど怖いものはない。

「裏・武蔵野第一図書館つていう携帯サイトがあるんですね」

伊藤は自身の携帯を開きネットに繋ぐ。

直ぐに小さな画面に黒背景のサイトが姿を現した。

堂上班の面々はその小さな画面に顔を寄せせる。見た事のないサイトだ。

武蔵野第一図書館にもホームページが存在するが、それは図書館紹介、本や映像の検索やオススメ本の紹介、コラム、イベントなどの

日程表などが書かれている至って普通のものだ。

「なんだ、これは」

堂上が凍てつく様な瞳^めで伊藤に説明の続きを催促する。

「い、いつ出来たのか、誰がサイトマスターなのは不明なんです。このサイトは図書館隊員の写真販売が主になります」

「ちょっと貸して、と小牧が伊藤から携帯を受け取り操作し始めた。

「なるほど。検索に隊員の名前を入力するシステムか。何人か知ってる隊員の名前で検索かけてみたけど、全員が全員ヒットするわけじゃないんだ」

そう言って画面を皆に向け直した。

画面には郁の名前が表示されている。

笠原郁：10件

郁の名前に堂上の眉間の皺^{しわ}が増す。

彼女への想いを箱につめて鍵を付けてきた。

それが壊れ溢れ出た想いは強く、彼女への独占欲は半端ではない。付き合いつようになつて、肌を合わせるようになつて、一緒に時間を過ごす時間が増える度に郁はどんどんキレイになつていく。

自分の手で変わる愛しい人に嬉しいと思つ反面、焦る気持ちも増す。堂上は拳を握り、胸を焼く怒りに耐える。

「ちょっと、この10件ってなにツツー！」

郁は携帯を取り上げて、自分の名前をクリックする。

そこには、いつ撮られたのか分からぬ画像がズラリと並んでいる。わなわなと携帯を持っている手が震える。携帯がピキッと音を立てたような気がするが今はそれどころではない。

「なに！この微妙なの！」

「私も見たけど盗撮にしては、まとも過ぎて本当に微妙なのよね」と・く・に・こ・れ、と柴崎が持っていた数枚のうち1枚を取り出

す。

「本当に、あんた可愛いわ」

「可愛い言いなー」

「私でも、これに一枚に500円出すわ……皆さんも見ます?」

「ひい！なにを言い出すか！」

「いやいやいや、盗撮ながらH口は一切なし。敵ながら素晴らしいカメラ使いよ」

「そこまで可愛いを連発されると見たい気持ちになるね、ね、堂上？」

郁と柴崎との会話に小牧が乱入する。

女性陣たちに深刻な雰囲気が出でないから踏み込めるのだ。

「本人が見せたくないものを見る気はない」

「可愛い彼女の写真でも?」

「郁が嫌がっているもんを無理に見る趣味はない」

「堂上教官ツツ」

郁が瞳を輝かせて堂上を見る。

感動する郁を横目に、柴崎がふふんと笑いを漏らす。

そして、

「それはこれを見た後でも言えますか?」

そう言って写真を堂上のデスクの上へと流した。

堂上のデスクへとヒラリと落ちた写真に自然と瞳が行く。

人間心理、とはそういうものだ。

郁でさえ、自身の写真にも関わらず男性陣と一緒に写真が落ちていくのを見守つてしまつたくらいだ。

写真が瞳に飛び込んできた瞬間、堂上と手塚の空気がピキリと凍つた。

迂闊で粗野ばかりが目立つ同期のこのよつた姿を手塚は見た事がない。

いくつだよ、お前と無意識に咳いでしまっていた。

「うわー、確かに。笠原さん、可愛いわ」

1人凍らす、動いていた小牧が体を折り曲げて写真に顔を近付けてしげしげと見る。

そこに写っている郁は確かに可愛かつた。

場所はベランダだろう。朝、起きたとこだらうと推測される郁が、眠たそうにトロリとした瞳を擦つて写真だ。

問題はそこだけではなかつた。

寝巻きだらう衣服はピンク色をしていて、手の先まである長い袖にタレ耳ウサギのフードを無造作にかぶつていた。

フードの中から、ちょっと寝癖の付いた髪の毛が見え隠れしているのも可愛さをアップさせている要素だ。

今もまだ固まつてゐる男は自分のデスクにある写真が悪夢としか思えない。

これは反則だらう。

堂上はボーゼンと写真を見詰めた。

こんなに無防備な顔を見るのは自分だけの特権のはずだ。

ホテルに泊まつた翌日、まどろみの中で見せる郁の顔を見るたびに心が温かくなるのを感じる。

愛しいと思う。彼女が愛しい。

だから、周囲がそんな郁を見る事が許せない。

こんな郁を何人の男が見たのか・・・胸に熱い怒りが宿る。やつと想いが通じ合つた大切な女を見せたくない。

「見るな！――！」

バンッという音がデスクに響く。力任せに振り下ろした掌は痛んだが、郁の写真を隠せるならこんな痛みは痛みに入らない。

「お前らが見るな！」

「堂上教官？」

周囲に可愛い可愛いと言われ続けていた郁は羞恥で顔を赤く染めていたが、堂上の鋭い怒気に驚いた声を上げた。

「・・・兎に角。見るな」

感情を露わにさせた自分を落ち着かせるために冷静にもう一度言つ。そんな堂上に一瞬、小牧が笑いそうになつたが、これが自分と毬江の立場だつたらと思い直すと、いつもの上戸を引っ込め写真を「テスクへ流した柴崎へ顔を向けた。

柴崎もちゃんと理解しているので、これ以上のからかいは見せない。

「この程度の写真は今まで結構あつたんですけど・・・」

特に、堂上班は人気高いですから、と付け加える。

「問題視はベランダってところかな？」

小牧が柴崎の言いたい事を先回りして答える。

「そうです。この写真の犯人に限らず、今まで出回つた写真は図書館内、訓練やイベントが主だつたんです。そんな写真に、いちいち目くじら立てるのもバカらしいので放置していたんですが、今回の写真は許容範囲を超えてます」

「え? なんで?」

郁が柴崎の言つている違いが分からず訊ねる。

周囲の面々は、そんな郁に対し全員が大きな溜息を付いた。

「あんたねー、よく考えて見なさいよ。あの写真はベランダを撮られてたでしょ?」

「うん」

「だから、その写真を写した奴は女の子の部屋を撮つたの。しかも

盗撮

「うん」

「・・・あんた、まだ分からないの...」この犯人は女の子の部屋を盗撮する変態なのよ。風呂や更衣室の写真をいつ撮り出してもおかしくないってわけよ。お分かり?」

「これだから、無防備娘はと悪態付く。」

一方の郁は柴崎の細かい説明でやつと事の重大さを理解して瞳を剥いた。

「ええ ッッ！－！ヤバイじゃない－！」

「だから、さつきから、そう言ってたでしょーが」

堂上は今やつと事の重大さを理解した恋人に呆れる思いと彼女の素直さに愛しさを感じる。

だがそれは、今の状況では複雑でしかない。

恋人の焦つた様子に顔を顰めるばかりだ。

「「」の写真、どこで買うんだ？」

手塚が尤もな疑問を口にした。

柴崎も心得た体で、その質問に答える。

「伊藤一士が言つところ、欲しい写真の番号を入れたメールを管理人に送ると、郵便局留めの住所と振込み金額を指定してくるみたいです。支払いは為替か現金。その際の氏名は安倍大…ちなみに図書隊内で同姓同名は3名、全員、漢字が違います」

「…・郵便局留めて、一箇所？」

「それが、二、三箇所あるみたいです」

郵便局留めとは、郵便利用者が郵便物の宅配を断り、郵便局に留め置く事をいう。

事前に特別な手続きは必要ない気軽さ、受け取りを周囲に秘密にしたい場合、差出人に自分の住所を明かさずに済むというメリットがある。

「んー、意外と上手いやり方かもしれないね。口座振込みより足がつき難い」

小牧が腕を組んで感心する。

「ですが、このやり方だと写真が手に入る確証がないのでは？」

「それは、口座振込みでも同じじゃない?」

「後ろ暗い者同士の取引きだ。手に入らなくて騒ぎ立てるバカはお

らんだろう

騒ぎ立てたとしても取引相手の所在は不明…上手いやり方だな、と堂上が補足した。

携帯で知らされたカウンターの回り方を見る限り、それなりに取引きの信用があるのだろう。

「うーん、こんな話をす

紫綺は、堂上、持こ堂上こ聞いかずた。

「決まっているだろ？。これは犯罪だ。潰す！」

「やがて？早めに対処しないと、教官、笠原は危険かもしれない

卷之三

郁が、幾分真剣に話す柴崎に聞

郁が、幾分真剣に話す柴崎に問いかける。その顔は不安そうだ。
「ここ最近、一気にあんたの『写真』がヒットされてるのよ。それは、あ
んたが人気があるって証拠。あの可愛いウサちゃん『写真』でも分かる
事だけど、犯人も買い手もきわどい『写真』を求めてんのよ」
いつどこからか撮られている写真。

う人間がいる。

こんな事がない限り、発覚しない最低な犯罪だ。

「無論幾つも自分の身体を抱きしめていた。」

「そんな顔しないの。大丈夫よ、そうならない為に今話し合つてるんでしょ」

「うん」

まだ不安が抜けない声で郁が頷くと、それを払拭するように掌上に

肩を抱かれた。

力強い手の感触が伝えてくれる。

大丈夫だ。

「作戦会議をするぞ」

彼の言葉に力が漲るのが分かった。

ウサギ泥棒を探せ！（後書き）

この続きから書いてないです（汗）

君の思い出 ボクの嫉妬（前書き）

別冊図書館戦争？のプロポーズ後
堂上が嫉妬しますが、郁は昔が恥ずかしいです。

オリジナルキャラあり。

途中で話が止まっています。

君の思い出 ボクの嫉妬

徐々に空気が変わり、関東図書基地にも冬の訪れが見え始めている。そんな中、関東図書基地は、朝から慌ただしく動いていた。それは、特殊部隊も例外ではない。

全国の図書基地は、地域を大きく分けて、東北・関東・関西・中国・四国・九州・沖縄に存在し、図書館は個人経営、大学や短期大学、高等専門学校を含めたものを合わせると軽く4000を越える。茨城戦でもそうだったが、防衛・業務において応援がいる場合、地域基地へと要請し人員が動く事になる。

教育機関の図書においては、国に定められた資料としているため、良化特務機関は滅多に関与が出来ない。

尤も、良化特務機関による検閲対象になるのは、図書館法のもと、防衛手段を取つていてる中心都市の図書館だ。情報数が遥かに多いのも対象の1つだろう。

それだからこそ、地方図書館の業務経験・攻防戦の実戦経験の差が激しくなる。

それを回避する為に始めたのが、数年に1、2回の割合で全国の隊員を対象にした研修出張だ。

それは、2週間に及ぶ大規模なものである。

だが、日頃から特殊部隊は、要請があれば年がら年中、各図書館の戦力アップのためにその都度、数人、または全隊ごとに出張をしているので関係がない。

それを、つまらん！と言つのが関東図書基地・特殊部隊隊長の玄田竜介だ。

彼の一言により、関東図書基地では全国図書基地の特殊部隊員候補生を数人受け入れ訓練を付け、候補生たちの適正を見るのだ。

そして今年も隊長の独断により、東北から1名、関西から2名、四国から1名、九州から2名、沖縄から1名、計7名の候補生たちが関東図書基地に赴いていた。

全隊会議室に集められた特殊部隊の面々は、大きなスクリーンの前に整列している候補生たちに興味心身だ。

最後尾の席に座っている堂上班も興味を持つて見ている。特に、郁と手塚だが。

この2人は、新人から特殊部隊所属になつたために防衛員の経験がない。

この候補生たちは今は防衛員所属。同期といつ立場が多いのだ。

「こんな研修、初めてですね！」

「お前らはな」

「俺たちが配属される前も研修があつたんですか？」

「あつたよ。確かに笠原さん達が配属される2年前だつたかな…堂上？」

「そうだ。あの時も、あのおつさんの思い付きで酷い目にあつた」「隊長ですもんねー」

「笠原、その言葉だけで片付けるな」

当時を思い出したのか堂上が、痛そうな表情をする。

それを郁がクスリと笑うと、笑うな、と不貞腐れた表情の堂上が郁の頭をこつくる。

どこから見てもバカッフルだ。

そんな中、研修説明及び特殊部隊候補生の紹介が副隊長の緒方により説明が始まった。

私語をやめて注目する。

約15班に別けられる特殊部隊のうち、7班が候補生を受け入れてゐる事。

2週間の研修の間、なにかしらの障害が起こらない限り（良化特務機関の検閲、図書館業務など）、隊長が組んだ特別メニューをこなす事（これ全班強制）

適正を判断するのは10名、それを判断する人間についてはシーケレットとされているために、選ばれた者は他言無用という事。

「 以上。解ったか？適性判断する者は、後から隊長から打診があるらしいぞー。じゃあ、今度は候補生自身に紹介でもしてもらひつとするか」

整列した候補生たちが、緒方がいる中央から左順に所属図書館名と氏名、階級を述べていく。

郁はほうほうと頷きながら聞く。

やはり、年齢的にも階級的にも郁と手塚と同じくらいだ。親近感が沸くつてもんだ。

今のところ、年下の候補生は現れていない。

関西の候補生1人が紹介を終え、次の候補生の紹介が始まった。その声に、ん？と違和感を感じた。だが、なにが気になるのか分からぬ。

「関西図書基地より参りました、西井誠二等図書生、26歳であります。研修の間、宜しくお願いします」

「あれ、あの西井って三生、関西のイントネーションじゃないね」「小牧が後ろから声を掛ける。

郁が感じた違和感はイントネーションの違いだらうつか・・・
「喋り方は、関東か？」

「そうですね、出身は関東かもしませんね」

堂上と手塚が相槌を打つ。

その間もずっと郁は不思議な違和感が続いていた。

何かを忘れているような、何か、何か・・・思い出しそうだけど出てこない。

うつかり娘である郁は、いつも物忘れで堂上に鉄拳を食らっているくらいだ。自分が物忘れの激しい質だと理解している。

でも今回は、何かが首下まで出掛けかっている感じだ。

そう…あれは、まだ中学生の時、

「コノキオクガタダシケレバ・・・

「あ ッッ！・・・！」

耳を塞ぎたくなる様な絶叫が上がる。

その瞬間、候補生たちの紹介が止まり、シーンと会議室が静まり返つてしまつた。ついでに叫んだ犯人はここです、と示さんばかりに立ち上がつてしまつたものだから注目も浴びてしまつ。

その時、ガタツと鳴つた椅子の音がなんともマヌケに聞こえた気がした。

突然の事に郁の隣にいた手塚も後ろにいた堂上、小牧も驚いて郁を凝視するばかりだ。

自分のしでかした状況に今さら気付いた郁はサーと音を立てて青褪める。

私はなんて事をしてしまつたの ！

「アハハ…アハハハ…なんでもありません。どうぞ、つづ・・・つたあーツツ！！」

笑つて誤魔化そうとしたが、堂上からの鉄拳が飛んできた。

「アホか、貴様は！突然絶叫してなんでもないとは言わせんぞ！」

堂上も負けてはいな怒鳴り声だ。

自分でも迂闊だったと分かっているが非難の声が上げてしまう。今も頭がズキンズキンと脈打つていて。

恋人…婚約者となつた今でも、上官という顔をした堂上に容赦はない。

「殴る事ないじゃですか！」

「前に指に噛み付かれた経験があるもんでな」「な！そんな前の事を持ち出さなくともツツ」

「はーいはーい。ストップ、お一人さん」

小牧が体を郁と堂上の間に割り込ませ話を遮る。そして、机をトン

トンと叩き、壇上を指した。

「注目、浴びてる」

特殊部隊の面々はいつもの事だという風に愉快そうに見ているが、候補生たちはそうではない。

鳩が豆鉄砲を食らつたよつたな顔をしている事が遠目からも想像出来た。

堂上がバツの悪そうに壇上の緒方に頭を下げた。

「申し訳ありません。続きをお願ひします」

ほら、謝れという堂上の言葉に郁も頭を下げよつとした時だ。

その声が郁を呼んだ。

「笠原？笠原郁か？」

候補生の西井が驚いたように声を上げた。

今度は、西井へと視線が集中する。

関東で女性初の特殊部隊員という肩書きは全国的にも有名だが、『笠原郁』という名前は知られていない。

茨城戦や当麻藏人氏を大阪へと送り届けた時のように事前に情報を流してない限り彼女を守護するために伏せられていると言つた方が正しいだろう。

そんな対象に対し、フルネームで呼んだ男は何者なのか…他の特殊部隊員は怪訝な表情をする。

郁はと、やはり自分の記憶通りなのだと、思い力なく椅子に座り込んだ。

「西井」

「おい、知り合いいか？」

隣に座っていた手塚が尋ねた来るが返事をしない。

出来ないのだ。今、郁の頭の中はグルグルと過去の自分が回っている。

本当に

あそこにいるのは彼なのか
あの時、私はなにをした
・
・
・

「ギャア　ツツ――――!

今度は突つ伏

卷之三

手塚が身体を仰け反らせる。郁の頭振りの余波らしき風を感じて顔

どんだけだ。

堂上も郁の突然の奇行に驚くばかりだ。

壇上にいた緒方も訊ねてくる。

郁は渋々顔を上げると西井の方を見ない様にしながら緒方の質問に

「日暮三景」、中止。)

郁の言葉に特殊部隊の面々が興味深そうに西井を眺める。

だが、先程の郁の態度はいただけない。いつもの郁ならば同級生に会つて喜びこそすれ悲鳴をあげるのはおかしいだろう。

「同級生に対する態度かよ。最悪だぞ、お前」
手塚が指摘する。

郁もそれが分かっているためか少々バツが悪そうだ。

「うつさいー！驚いたんだもん」

「驚いたって態度か、あれが」

「驚いただけなの！」

ぎゃいぎゃい騒ぐ郁たちにもう一度、緒方の注意が入った。

まだ、候補生の紹介は終っていない。

郁は自分のやらかした失態に焦りながら壇上へ向かって謝罪を入れた。

今度こそ止まっていた候補生紹介の続きが開始されるが、その間も特殊部隊の興味津々の視線はやむことはなかつた。

一方、未だ拳動不審の郁を眉を顰ひそめたまま、何かを言いたそうにその横顔を見詰めてる堂上を横目に小牧は、この研修も平和に終らない予感をひしひし感じて、これからを思い小さく溜息を付いた。

玄田の面白いからーの一言で西井誠は堂上班が担当する事に決まった。

事務室へと戻った郁は落ち着かない様子で、堂上たちに挨拶をする西井の背中を見ていた。

そう、あれは子供頃の話だ。

なにも気にする必要はないのだと頭では分かっているが、茨城県産純情乙女だけに感情がそれに付いていかない。

落ち着けと呪文のように口の中でブツブツと唱え続ける時に、不意打ちのように突然話しかけられ、ビクッと身体が跳ねた。

「笠原もよろしくな」

「え、あ、よ、よろしく」

何とか繕つて返事を返すが、動搖していますというオーラがありあ

りだ。

だが、正面から垣間見た西井の姿は郁の記憶の中で知る姿とは違つていて、それが過去なのだという事を自覚させてくれた。

幾分、それで冷静さを取り戻せた。

「中学振りだね」

「ホント、久しぶりだな……笠原は変わつてない」

「変わつてないってどんだけだよ」

手塚のツツコミが拍車をかけて冷静にさせてくれる。

郁はいつもの様に噛み付いた。

「失礼ね！表に出る、手塚！」

「阿呆、いきなり勝負を挑むな」

ガルルと唸りだしそうな郁の頭に堂上の手が乗る。それがストップバーの役目を果たし、釣り上がつていた眉を下げた。

さすが、猛獣使い堂上である。

「酷いと思いませんか！私だつて昔から比べると変わりました！」

小牧もクスクス笑いながら話に入つてきた。

「笠原さんはキレイになつたもんね、はーんちょ
「知るか！」

小牧のからかいに反射で答えた堂上に郁がプウと口を膨らます。

「それ、酷いーー自覚しろつて言つたの教官じゃないですか！」

「つバ！今それを言つか！」

「はーいはーい、イチャつくのは終業してからにしてね、西井が困つてるよ」

「最初に言い出したのはお前だろーが！」

「それ言つなら最初は西井だよ、ね
と、小牧が西井に笑顔を向けた。

向けられた西井は、今までのやりとりで判断した事を口に出した。

「あの、もしかして、堂上一生と笠原は？」

「そ、この人たち、交際を通り越して婚約しちゃつてる仲つてわけ
婚約、その言葉で郁の顔が赤く染まる。

顔を伏して堂上の袖を掴む仕草が可愛らしい。

堂上は、郁のそんな行動に照れが生じるが、それを咎める気はないらしい。

「ホンと咳払いをすると、この話は終わりだと話題を変えた。

いつものように堂上から呼び出しが掛かったのは、21時を少し回つた頃だった。

図書基地内での小さなデートは、今や郁と堂上にとつて当たり前のようない常となつていて。

欠けた月明かりを頼りに進む薄暗い道。

安全対策のために植えられている木々は恋人達の逢瀬のためにあるわけではないのだが、何かとイチャつく場所に不自由な寮住まいの隊員たちにとつては便利な所なのだ。

堂上は本日も、郁を木陰に隠して、その唇の甘さを味わっていた。

「ん・・・

息継ぎのたびに漏れる郁の声に煽られ、堂上の舌が激しい動きを見せる。

何度も交わしているはずなのに、唇を離した時には力が抜けてしまつていて、郁の肢体は堂上へと縋り付かなければ立つていられない。

「篤さ・ん・・・」

キスを終えた後、堂上と瞳を合わせるのが未だ恥ずかしく、堂上の肩に頭を押し付けて羞恥が去るのを待つのも変わらない。

「ん?」

「何か怒つてます?」

恐る恐る上げた顔は堂上の感情を必死に読み取らうとしている。

「どうして、そんな事を言つ?」

「だつて…」

郁は堂上から身体を放して、そつと手を伸ばし堂上の眉間に触れた。

「あつと、皺がよつてゐる」

私、また何かしましたか？と小首を傾げる姿は、叱られるのを怯える子供のよつに頼りない。

堂上は眉間に触れる郁の手を軽く掴んで下ろさせた。
そして、郁の額に額を押し付けて瞳を合わせる。

怒ってなし

ホノトコロ

「ああ。・・・何か、お前、俺に怒られるような事でもしたのか?」「え! してない!!!」

「本当か？」つい一歩

いたよな、何でだ？

候補生として現れた西井誠の存在が気になっていた。

あの前の態度を見て氣にならぬわけはない

無意識に出来ていたものだ。

だが、郁に指摘されたのを良い事に、せり気なさを裝つて郁に西井の事を聞く事が叶つた。

普通に聞いてしまえば良いものを、堂上は郁からもたらされる最悪な答えを想像して、こんな事がないと聞くキッカケが掴めなかつたつていうのもあつた。

聞かれた有は
二口と叫り声を上げながら
なはやと思案顔をして
いる。

あつちこつちへと視線をさせた後、一度顔を伏せググッと歯を食いしばり、徐に強い眼差しで堂上をキッと射た。

軽蔑しないでくれますか!!」

「アハハハハーツツ！ もう、笠原サイコーね」

話を聞いた柴崎は笑い過ぎで浮かんでくる涙を拭つた。

止まらない笑い声に郁のはテーブルに突つ伏して瞳だけで柴崎を睨み付ける。

「お前、昔からそうなのな」

手塚も呆れたように向かえ側に座る郁の旋毛を見やる。^{つむじ}

「うーるーさーいー」

「そうだろ。いくらガキの頃でも女だろ、お前。ホントに信じらんねえって」

「あの時はツツ！！タイミングが悪かつたって言うか！」

「タイミングつて…そのタイミングでドロップキックを食らつた西井くんの身になりなさいよ」

シレつと言い放つ柴崎に郁はウガアと唸つて敗北を認めた。その様子を二コ一コと笑いながら、郁の隣に腰掛けていた西井が待つたをかける。

「まあ、あの時は俺が全面的に非があつたわけだし」

「それでも、背後からの全力ドロップキックはありえんだろ？」「ひう」

「ホント、あんたの得意技だつて事が分かつたわ」

「そういうや、堂上一正にもかました事があつたよな」

「わわ！その過去は抹消して！」

郁は両手をバタバタと振り回し空気を切つた。

新人隊員の頃の自分の無知さ加減は今や穴を掘つて埋めてしまい程の痛い思い出だ。

郁たちは今、同期組でよく呑みに行く居酒屋にいた。

なぜ郁や柴崎、手塚に加え、西井までもいるかと言つと、研修が始まって3日目の今日、柴崎に誘われる形で同期同士の親睦会を兼ねた飲みに繰り出しているからだ。

最も、その目的は頑なに何かを隠したがつて、いる郁を締め上げるための柴崎の企みだったわけだが。

「俺、堂上一正にドロップキックをましたとこを見て、あの時は笠原とは相成れないと思つたぞ」

だから、今が不思議でならん、と眞面目に答える手塚に柴崎がこれでもか！といふよつた高笑いをした。

「ヤ、ヤバい…苦しい…そ、それで、笠原あんた堂上教官にはこの

事言つたわけ？」

「言いましたとも！」

「反応はどうだつたのよ」

郁はあの日の堂上とのやり取りを思い出し、ああ～と力無く額をテープルに打ち付けた。

郁の話を聞き終えた堂上は我慢の限界よりしくブツと吹いた。それでも笑いを耐えようとした結果、ヒクヒクと口元がひくついてしまつている。

「だから、言いたくなかったのに～」

その堂上の表情から軽蔑の色が見られない事に安堵するものの今度は羞恥に襲われいたたまれない。

「お前…それはないだろ…」

小刻みに震える肩に縋り付き郁は、過去の思い出に思いを馳せた。

中2、夏。

身長をダシに振られて1週間、郁の乙女心は未だ癒されていなかつた。

振られた相手と同じクラスなのも原因の1つなのだろう。

郁は昼休みになると、その傷心を癒すために、以前先輩から教えて貰つた本を読むのに最適な木陰へ通つていた。

今日も給食を食べ終わると、自慢の足で図書館へ足早く移動する。新刊コーナーを物色して、ずっと読みたかった本を見付けた。

ほくほく気分でそれを借りる。

そして、すぐ図書館から出ると今度は階段を下りる。すると校舎内に中庭が見えてくるのだが、そのベンチには瞳もくれず早足で進んで行く。

校舎の裏手の庭のもつと奥が郁の目的地だつた。早く読みたいと急かす気持ちが、足を速まらせたが校舎裏に入ろうとした時、人の話し声を聞いて足を止めた。

「私、西井くんが好きです」

ヤバい！ 郁は瞬間的にそう判断した。

秘密の中庭には、この道を通らなければいけない。

だが、他人の告白を聞いて良いわけじゃない。自分がされたら傷付く。

郁は来た道を戻ろうとした。

その時だ、告白されただろう男からの言葉が耳に直撃したのは。

「俺は君を絶対に好きにはならないよ…もし万が一にも付き合つても長くは続かない」

冷静な言葉。

郁が告白した時でも、された男の子からは焦りみたいなものが感じられたのに、この声の主からは感じられない。

1つ1つの単語に好意がないと感じられる程に冷静で静かな返事だった。

「それでも好きなの…」

語尾が震える声。泣き声だ。

恥ずかしいのだろう。

傷付いているのだろう。

啜り泣く声が痛々しい。

「君の一方的な好意なんて迷惑だ」

だが、無情にも返つて来た言葉は郁の心中にも突き刺さつた。

酷い、そう思つたが最後、郁は後先考えずに、その場に飛び出し全力疾走でその無情男にドロップキックをかましていた。

油断していた背後からのドロップキックは堂上にかましたものより数倍威力があり、西井少年は顔面からガガガガと地面に流れる形になつた。

驚愕の衝撃から何事かと振り返つた顔には額、鼻、唇に至るまで擦り傷が出来ている。

告白した女の子も口を押さえてボーゼンとしている事しか出来ない。西井少年と瞳が合つた郁は、グウと息を吸い込んだ。

「断るにしても言い方つていうものがあるだろーがツツ……あんたがもし好きな人から同じように言われたらいづついう気持ちになんのよー！」

好きな人に振られて1週間、笠原郁傷心中。

その声は涙声だった。

「笑いを我慢しようとして引き攣つてた」

チビチビとグラスのお酒を呑みながら、堂上に過去の告白した経緯を話した。

「優しいわね、彼氏は…あ、もつフィアンセか」「黙れ柴崎！」

柴崎は尚もカラカラ笑い郁を沈める。

「もうね、笑いを堪えようとしてくれてるのは分かるんだけど、あそこまで小刻みに震えられるといったまれない」

いつそのこと爆笑された方がよかつた、と郁は天井を仰いだ。

「本当に笠原は堂上一正に大切にされてるな」

「そうよー、あの王子様は笠原が大切で大切で食べちゃいたいくらい大切にしてんだから」

「なんだそれは！」

「俺でもお前を大切にしてるの分かるぞ」

朴念仁の手塚にまで言われ郁は顔が赤くなるのが分かる。

堂上はいつでも郁に対し、真摯で優しい。

「そりなんだー、そりや残念だな」

「は？」

コクリとグラスを煽つた西井は怪訝な顔をした3人に涼やかな笑顔を向けた。

「俺の初恋つて笠原だからさ。あの時の笠原の言葉があつたから人には真摯にいようと思えたし… そう考えると残念だなって思つて」

これより先、書いていないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1178v/>

図書館戦争・短編集

2011年7月25日01時09分発行